
けいおん! ~夢翔る物語~

黒翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん～夢翔る物語～

【Zコード】

Z5677U

【作者名】

黒翼

【あらすじ】

今年から共学になつた桜ヶ丘高等学校そこの廃部寸前の軽音楽部にある少年が出会つた。そこから、物語の歯車が回りだす…という事で、出来るだけ早く更新しますのでよろしくお願ひします！！

一話（前書き）

はじめまして黒翼と申します。

請謁ながら、これから小説を書かせていただきます。

どうぞよろしくお願ひします。

今日はオリキャラのみしか登場しません（汗）

一 話

～ありきたりなプロローグ～

カリカリ…

シャーペンを滑らせる音が響き渡る…

何故、今現在そういう状況かといふと

ここが高校の入学試験会場だからであり
それと同時に俺の

第一希望の学校である桜ヶ丘高等学校の
入試中だからである。

キーンゴーンカーンゴーン

「それではペンを置いてください」

試験官の掛け声がかかり

周りからはペンを置く音が聞こえる
ちなみに俺はもつとつとペンを置き
解答用紙を裏返していく。

「では、各自忘れ物の無いように退室して下さい」

その声と同時に俺の前の席にいた男子が声をかけて来た。

「…………やつと…………やつと終わった」

「……お前何で入試だけで死にそつた顔してなんだよ

「イツは俺の幼馴染の神谷幸治
親がパーティシエの菓子屋の息子だ

「お前にどつてはそうかもしないけど俺にどつては『だけ』では
済まないレベルなんだよ……」

「お前がアホだからだろ」

「……………」

コイツに出会ってから俺は親が優秀だからといって子も優秀になるとは限らないと知った。

そもそも、「イツの親が優秀かどうかは分からんが…

「まあンな事はどうでもこー。とにかく俺は帰る…」

「……………」

「ヤダ」

「早いくての…」

一話（後書き）

主人公の名前は次回から出そうと思います。
決して忘れたわけではありませんよ（笑）

先ほどのやり取りの後、俺は幸治と別れ
自宅へと向かう途中
小腹が減つたので某ハンバーガーショップに寄り
腹ごしらえをしてから帰宅した。
自宅の『川霧』の表札が見え
玄関に付きドアを開ける…

「ただい…」
「おかえり！…」
「…」

「雄河！テストどうだつた！？受かりそつー…？…？」

帰宅早々姉貴に肩を鷲掴みにされガクガクと揺らされた。
ちなみに雄河つてのは俺の名前だ…

「おー姉貴」

「どうなのー・へ・どうなのよー・へ・」

「…………とつあんづ離せ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「首が痛いんだけど……」

「悪かったわよ……」

「何でテストして帰ってきてこきなり

「こんな仕打ちを受けなきゃならねんだ……」

「まあまあ、茜も悪気があったわけじゃないんだし」

お袋仕方無さそうに話しかけて来る。
茜つてのは姉貴の名前な。

「で、どうだったのテスト?」

続けてお袋が聞いてくる。

「まあまあアーティだな」

「受かりやうなの?」

「知りん……」

「早ーー?」

姉貴がすかさず「ジッ」「ハリ」を入れてくれる。

「ま、どうでもいい……お袋、夕飯つて何だ?」

「あなたの合格を祈つてカツよ」

それ昨日食べるべきじゃね?

とこうシッ「ハリを入れようかと思つたが
面倒なのでやめておいた……

「じゃあ、俺はそれまで寝る。出来たら起こしてくれ……」

「はいはい

そんでもって夕飯の時間まで
時間にして約四時間の間ずっと爆睡していたのだが
後に時間になつたらしく母親に起こされ
食卓へと足を運んだ…

夕飯を食べた後

先程四時間も寝たにも関わらず
強烈な睡魔が襲ってきたが
抗う理由もなかつたので
そのまま睡魔に身を委ねた

「…ん？」

とふと田が覚めた
時計に田をやると短針が一と二の間を指しており長針が六を指して
いた。

「… わつを寝すぎたか」

田が覚めてしまつたので起き上がり
電気を点けた時
ふと部屋の正面にあるギターに自然と田がいった

（やつこや「イイツも長い間触つて無かつたな…」）

そんな事を考えながら

俺は久し振りにそのギターに触れた

「やつこや、『イイツが俺の所に来て今年で十年田か…』

思わず言葉が漏れる。

ポール・コード・スミス

ちなみに『トイツ』といふのは P.R.S. といふギターの事だ。
『買った』ではなく俺の所に『来た』という表現なのは
このギターは俺が勝ったのではなく親父の知り合いの
『コーディション』から貰つた物だからだ。

「久し振りに弾いてみつか…」

ベットに腰かけたままアンプには繋がずに弾いてみた。

／＼＼

(なんだ、懐かしいな)

ふと、前の鏡を見ると
自分が映つておりその口角が上つていた
ハッとなり演奏をやめる

「はあ…」

何故、笑うのを止めたかとこうと
なんと言つたのだろうか…笑うと俺の顔は…怖いのだ
自分でもかなり気にしている…
なので極力笑わないようにしているのだ。
そのことを気にする原因になつたエピソードもあるのだが
それはまたの機会にするとしたよ。
まあ、別の理由もあるんだけどな……

「…寝よ」

ギターをいじつて多少眠くなつたので
寝ることにした。

ベッドに横になると

案の定睡魔に襲われ意識が飛びそうになつた。
しかし飛ぶ寸前に今日が合格発表だという事が
頭をよぎつたのだがもう睡魔は目前に迫つている訳で
脳が殆ど機能せずそのまま眠りへと落ちた…

「ああ～ヤベヒト～…」

「お前の今の状態こそヤベヒト思ひなんださぞ」

「うむせえー俺はそんなに精神力強くねえんだよーー。」

「分かった分かった。だったら少しボリュームを下げる

何故、今このような状況かとこうと

1・あの後、目が覚める

2・幸治から電話が入って一緒に合格発表を見に行こうと誘われる

3・断るが幸治が無理やり家の前へ

4・仕方なく一緒に行く

こんな具合だ…

そういうふうに

昨日、テストを受けるために訪れた学校
桜ヶ丘高等学校へと到着した
だが、校門の前に着いた所で足が止まった

「……」

「どうした？あ、もしかしてお前もびっくりしてきたー！？」

違う、と言いたかったのだがとりあえず今日

前の状況の整理を優先しよう

：何故、男子率がこんなにも低い

いや、分かつてはいるんだが男子と女子の比率が
8対2くらいある。普通ならありえねエんだが
まあ、今年から共学化なんだからしょうがないと言えば
しょうがないのだひつ。

よし、と心の中で状況整理がついたので
再び歩き出す

「ちよ、おこ、待つて」

と、慌てて幸治も後に続いてきた

「あ

俺たちもそうしようかと思つた所
合格者発表の掲示板の方に
俺の受験者番号があるのが見えた。

と幸治が漏らす
何故、そう言つたかというと
合格発表の掲示板の前に受検者なのであるつ
女子がごった返していた
周りには女子が去るのを待つてゐるのだろう。
数人の男子が立つたまま話していた。

「うわあ…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

自然と声が漏れた

「どうした？」

「俺、受かつてたわ
「マジでー?」

「マジで」

「いいなー、俺の番号はまだ見えない…」

「じゃあ、先帰る」

「ちよつと待て……待っててくれてもいいじゃん！？」

「冗談だ、そこの自販機の前の椅子に座ってる

「分かった、見終わったらソッチ行くわ」

と言われたので俺は自販機でコーヒーを買つて椅子に腰かける。

ピッピッと携帯で電話をかける
相手はもじりんお袋だ。

ガチャッと音がしたので通話を開始する

「あ、お袋か？俺受かつたから」

『ホントーへ良かつたじやない！？』

「ああ、サンキュー」

『ちよつと待つて西に代わるから』

「了解

『もしもし雄河？受かつたんでしょ？』

「ああ、おかげまでな」

『良かつたじやん…』

「おひー」

『お母さんが今日は幸治君の家と夕飯食べに行こうって言つてゐる』

「まだ、幸治が合格と決まつた訳じゃね? けどな」

『大丈夫! 雄河が受かったなら絶対! ! ! 』

「今の言葉、多少刺があつた氣がするんだが…」

『まあ、幸治君も受かってる事を祈ってなさいよ』

「了解、じゃあな」

と黙りて通話を切る。

すると、前の自販機で女の子一人がジュースを買っていた

「受かって良かったね、お姉ちゃん」

「うん…ありがとう臺へ」

そんな話をしながら「うひうひ」と泣いてきた
すると、お姉ちゃんと話していたので妹さんであの「娘が

「すみません、お隣いいですか？」

と聞いてきた

特に断る理由もないのに

「どういへ」

と承諾する

「あつがどうぞります。」

と言しながら

妹の方がペコリと頭を下げた

「ねえねえ、君も「J」の高校受けたんだよね？」

「もうだなび、どつかした？」

「君も受かったの？」

「ああ、受かったよ」

「ホントー? ジャア、私と同じだねえ~」

「君も受かったんだ?」

「うん~」

「それじゃあ、同じクラスになれるといいね」

「わうだね～。あ、そうだ名前なんて言ひの～。」

「俺？俺は川霧雄河だよ」

「へえ～、私は平沢唯だよ」

「あ、私は妹の憂です」

またもペコリと一礼。

なんかしつかりしてゐる妹だな。

なんて思つてゐると唯と名乗つた方の女の子が
椅子に腰掛けながら唸つていた

「どうかした？」

と声をかけると

「雄河君だから、コウくんでいいか！」

「…はい？」

「呼び方だよ～雄河だからコウくん～」

「滅茶苦茶」つ恥ずかしいんだけど」

「大丈夫だよ～可愛いし！」

嬉しくねエ～ッ！！

と言おうかと思つたが

なんか、傷つけそうだからやめておいた。

「わうだ、メアド交換しよう」

「別にいいぞ」

「あ、私も言いですか？」

「もちろん」

メアド交換なんて久し振りだな…

そんな事を思つてゐる内に交換が終わつた

「ありがと～」

「あ、もうこんな時間…お姉ちゃんもう帰らなこと」

「うん、分かった。じゃあ、また今度ねコウくん」

「それでは雄河さん、お先に失礼します」

「ねつ、じやあな」

と、唯& amp; 豊の二人が帰つて行つたのとほぼ同時に…

「雄河！雄河！！雄河！！！」

「ンだよつるせHな

「俺も……俺も受かったぜ～」

「ナウか

「軽ッ！…？？」

「お前なり吸がると吐つてただけだ

「セツか？いや～濡れる要素があったよ～

(ベニに濡れる要素があつた？)

「…まあ、ンな事より帰るか？」

「ナウだな

「やつこや、家のお金がお前んとこの家族と家の家族で夕飯食べに行くとか言つてたぞ」

「おお～やつや楽しみだ～」

III部（後書き）

やつと唯 & amp; 憂登場！！

次回は入学式をメインにやるやつと思つていらっしゃいます。
律 & amp; 鶴 & amp; 紗もちゃんとからみせ使用かと思つて
います。

「ああ～、くそったれが！！」

只今、俺は学校への通学路を朝飯も食べずに全力疾走中だ。
何故走つてるかって？

それは実に簡単、ベリーイージー、文字通り朝飯前
寝坊したからだ。

昨日の夜、幸治からのメールに付き合つたせいで
睡眠時間が大幅に減少

そのため起床時間も大幅に遅れたつて訳だ。

だいたい家から学校までは距離にして1キロ弱
だが流石に1キロを全力疾走し続けるには長距離走の選手でも無い
限り無理がある。

途中有るコンビニで給水タイム。

ここまで来てしまえば学校までは歩いても五分くらいだろう。

「確かに入学式が始まるのが8時だったな……」

携帯の時計を見ると7時50分を示していた。

(なんとか間に合つたな…)

なので、後はコンドーラーハーイを買つて
やつくつと学校に行くことにした。

すると、後ろからなんだか騒がしい声が聞こえてきた。

「雄河～！お前も寝坊したのか～？」

「9割方お前のせいだな

「悪かったって～」

(「マイツ、ザツテハ悪いこと思つてねハな

もちろんこのクラスで俺の名前を知っているのはアイツ位だろう

「あ、ユウくん~」

そういうしてゐる内に学校に到着した。

クラス割を見たところ

何者かの陰謀により幸治と同じクラスになつてお

こひ、数ヶ月の内で一番重いため息を吐いた。

クラスに入ったところ

俺と幸治以外は全員揃つて着席しており

胸に入学式や卒業式で付けるような花がついていた

クラスを見まわした所

やはり女子の数が圧倒的に多い

というか女子の人数が男子の4倍くらいだった。

すると、窓際に座っていた人物から声をかけられた

当たり前ではあるのだが唯だった。

いやあ～実に悪気のない笑顔で手を振っているのだが
ひとつ言いたい事がある…

クラス内でその名前で呼ぶな！！

どんな羞恥プレイだこれ！？

クラス内からは苦笑が漏れていた。

この場で俺がとるべき行動はただ一つ…！

唯を黙らせる

考えてから行動に[与すまでの時間、約0・5秒

「ゴウく…わつ…」

「平沢、頼むからその呼び方は止めてくれ」

「え～いじやん」

「…分かった、二人きりの時はそれでいい
でも頼むからクラス内では止めてくれ」

「ふ～ケチ～」

「な？頼むからさーー！」

「うーん、分かった

この間の時間約10秒
やつと、コイツから離れられる
説得に成功したので自分の席を探す
すると、何の因縁なのか
俺の席は唯の隣だった。

「マジかよ…」

絶望したね

・・・・・・・・・・・・

入学式も終了し

今日はもう帰宅だそーだ。

(帰つたらまづ寝よつぱりかに睡眠時間が足りない)

などと思いながら席を立つと
唯に止められた

「ねえねえユウくん。今丑のじの後ヒマ?

「睡眠とこう仕事がある」

「(一)の後、少しあ茶でもしてこいつと一緒にうんだけど一緒に来なー」

「俺の発言完全無視か!-?」

「何だコイツの見事なスル つぶりは!-?」

「ちょっと、合わせたい人がいるの」

「合わせたい人?」

「 もう、 合わせたい人へ」

「誰だよ？」

「それは後のお楽しみ」

「？」

まあ、別にいいかそんな時間かかんないだろ？

「分かった」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「で、その合わせたい人ってのは？」

「ちょっと遅れるから先に行つてだつて」

「ふ～ん」

「あ、忘れ物しちゃったからひょっと待つて」

「了解」

すると、唯は教室の中へと消えていった。

それと同時にドンと俺の背中に強烈な衝撃が訪れた。

「うおっーっ！」

「うひ

倒れそうになつて踏みとどまる
どうやら、後ろから誰かにぶつかられた様だ
振り向いてみると一人の女子が尻もちをついていた

「あ、すみませんー」

「こや、別にいこけビ…」

特徴的な娘だつた

髪は茶色っぽく長さが唯と同じくらいで
前髪をカチューシャで上げていた。

「律、だから走るなつて

と言つてきたのは黒髪を腰のあたりまで伸ばした

前髪が姫カットの女の子だった。

「あ、澪~」

俺にぶつかってきた女の子は律とこじらしく黒髪の娘は澪といひしき一応覚えておくか…

「律、なんで転んでるんだ？」

「いや~、ちよつとぶつかっちゃって~

「何してるんだよ全べ~

黒髪の娘が恐る恐る俺に話しかけてきた。

「あ、あの…お怪我あつませんか?」

「あ、あ別に大丈夫だけど」

「良かった、ほら律お前も謝れ」

「すみません！？」

「いや、大丈夫だよ」

「本当にすみませんでした
ほら律行くぞ」

そう言い残して二人の女の子は去つて行つた。

「何だつたんだ？」

一人でボソッとつぶやいたら後ろから声をかけられた

「あの～」

「ん？俺ですか？」

「あ、はい」

と、振り向いたら金髪に近く眉毛が特徴的な
おっとりとした感じの女の子だった。

「何か御用ですか？」

「これ、落としましたよ」

彼女が差し出してきたのは
生徒手帳だった

恐らくぶつかった時にでも落としたのだな。

「あ、どうも」

名前を見ると確かに俺の生徒手帳だった

「いえ

とこっこつと笑うとその娘は
人ごみの中へと消えていった。
すると

「お待たせ」

「言ひながら唯が帰つてきた

「随分遅かつたな」

「ちよつとね～」

と唯が意味深な顔をすると

「雄河！俺も一緒に行く」とこじしたぜ～

「スマン平沢、俺帰るわ

「え？何で～！？」

「雄河！？」ちょっと待てって！」

面倒なのが入ってきてやがったな

「ハア」

とため息ひとつ、この時俺は
コイツ意地でも付いてくるなと俺は語った。

あの後、幸治の説得を試みたのだが
努力虚しく付いてきやがつた
なのでこれ以上疲れないためにも
幸治に対しては無視を執行中だ。

「といひで、平沢」

「ん? なあに?」

「お前、何でそんなに俺に構うんだ?」

「だつて、クラスで知つてる子が少ないから」

「それだけで?」

「うーん、後はコウくんと話すのが楽しいから」

「ふーん」

そつけない返事に聞こえるかもしだいが
正直、少し嬉しかった。

そういうしてゐ内に待ち合わせのハンバーガーショップに着き。
注文をして席に着くと間もなく一人の女子に声をかけられた。

「あ、あんね、遅くなつて」

「？…誰？」

「あ、和ちゃん」

「和ちゃん?」

俺と幸治が理解できずに
首を傾げていると誰から説明が入った。

「あのね、この子が私が会わせたかつた人」

「真鍋和です」

「ああ、俺は川霧雄河だ、んでコイツが神谷幸治」

「よろしくね~」

「えっと雄雅と幸治って呼べばいいかしら?」

「別に構わねーよ」

「オッケー」

「じゃあ、俺は和ちゃんでいい?」

と幸治が聞いた

「ええ」

「じゃあ、俺は一番無難な所で真鍋つて事で」

「分かったわ」

自己紹介が終わった所で
その後は、各自自由に話を始めた
すると幸治と真鍋が話をしていたので
唯に話を振る事にした。

「なあ、平沢

「なあ」「？」

「お前と真鍋つていつから一緒にいんだ？」

「えっとねえ、幼稚園のころからずっと一緒にだよ

「へえ～結構前から一緒にいるんだな

「うーん、アーリのドクターハント博士へんなつから一緒にいるの?」

「俺たちは親同士が俺達が生まれる前から仲良かつたらしいんだ」

「へえ」

「だから、生まれてからずっと一緒にいるよ」

「うわあ、すげーいね！」

「 それでもねHだら 」

「ううん、すまよそんなにずっと一緒にいるなんて」

「？：そんなモンか？」

ふーむ、良く分からんな..
まあ、一般人から見ればそうなのかもな
すると、そこで幸治がスネークインしてきた。

「お? 何だ何だ? 僕達に内緒に何話してんだよ~」

「べつっこ、大した話じやねエよ」

幸治を軽く受け流してから
四人で他愛もない話をした。

・・・・・

1時間程話してから
話のネタも無くなつたので
店を出ることにした。

・・・・・

店を出てから

少しすると唯が俺たちに話しかけてきた

「今日、すついじへ楽しかったよね

「まあ、結構楽しかったな」

「そうね、私も結構楽しかったわ、幸治は？」

「もちろんー楽しかったぜー！」

と、全員楽しかつたらしく

それぞれ感想を漏らした。

だが、唯が少し曇った顔をしていたので
ちょっと、声をかけてみることにした

「え？ した？ 平沢？」

「 は？」

「 ん？」

「 今日、 本当に 乐しかった？」

「 は？」

「 は？ くん 本当に 今日 乐しかった？」

「 ああ、 乐しかった も」

「じゃあ、何で今日笑つて無かったの？」

「シ……いやんじな氣にすんなよ、本当に今日は楽しかったから」

「うん、分かった」

今日楽しかった事は嘘じゃない
だが、それなのだが…

(笑ひ…か…)

そんな事を考へていると
十字路に差し掛かった所で
唯と真鍋が話しかけてきた

「それじゃあ、私たちほりつちだから、また明日ね」

「おうー・また明日ね」

「……」

「ユウくん?」

「雄河?」

「あ? 悪い、また明日な」

「うそ、また明日ね~」

「ええ、また明日」

と二人言い残し帰つて行つた。

「さて、俺達も帰るか？」

と、歩みを進めよつと思つた時
幸治に止められた。

「雄河」

「何だ？」

「さつさく、何を考えてたんだ？」

「別に何こも……」

それ以上は言えなかつた
幸治がいつになく真剣な顔をしていたから

「嘘、言わずに話してくれよ」

「はあ

自然とため息が出た。

「投票権は?」

「今回ばかりは無い」

「はああ…」

せつせよつも大きなため息が出た。

「…せひも、平沢に『今日は楽しそうじゃなかつた』『何で笑わなかつたの?』って言われたんだ」

「…あ」

「その」と少し考へてたんだ

「せひもひか」

「……」

「雄河、もひ『あの事』は忘れよひ

「無理言ひな」

「『あの事』は誰が悪いって事じゃねえよ、お前が抱える事はねえんだ」

「……」

「今は無理でも少しずつでもいいから、な？」

「……無理だ」

「あ、おい雄河」

「悪い、帰るわ

「雄河ー。」

幸治の声を背中に受けながら俺は駆け出した。
昔の事を思い出しながら…

(あの『罪』は絶対に消えない、それは俺が一番良く分かってるだから俺は笑えない)

五話（後書き）

今回は雄雅の昔の『闇』を出してみました。
雄雅の過去はこれから少しずつ出していきたいと思います

「雄河！ メシ食おつづけ

「 むお

と、面になつたのでこつものよひに幸治と
毎食の準備をする。

「 どう、これなりなんだけど」

とか言いながら幸治が話を振ってきた。

「あ？」

「お前部活とか入らねえの？」

「あ～、まだ決めて無い」

「そりそろ決めた方が良いんじゃねえの？」

「そもそもそうかもしないな…」

何しろ学校が始まつてから

二週間半はたつてる。

「でもなア、入りたい部活も無いし…」

「中学校の時みたく、また軽音部入れば良いじやねえか

「…バスだ

「まだ、弓削あつひんのか…」

「ハサウエイ

「マイツ人の忘れない記憶を掘り返しやがって…

「まあ、本人がそれじゃ あ仕方ねえか

そんな話をしこるとふと誰の声が聞こえてきた

『とりあえず、軽音楽部つて所に入部してみましたーー。』

『へえ、でじんな事するの?』

(「JRの瓶は圓鍋か…」)

『 わあ？』

(知らねーで入ったのかよ！？)

『 えつ？』

『でも、軽い音楽つて書くからきっと簡単な事しかやらないよ、口笛とか』

(なんだそのやる気の無いクラブへ)

『何？そのやる気の無いクラブへ』

真鍋よそのシジ「//」は非常に珍しい

・・・・・・・・・・・・

「よし、帰つか…」

昼食を食べた後

午後の授業によって体力を奪われた…
なので、とりあえず帰つて早く寝たい…

「ねえ、雄河…」

「あ?」

誰から声がかけられ振り向くと
真鍋が立っていた

「何か用か?」

「ちょっと、助けて欲しいんだけど…」

・・・・・・・・・・

「という訳なの…」

真鍋からの説明が終わり

少しばかり考え込む、そして

「えっと、完結に言い直すと平沢が軽音部に入つたがギターなんて
できないから断りに行きたい、だが一人で行くのは不安だから誰か
に付いてきてほしい、でも真鍋は用事があるから一緒に行けない、
だから俺に白羽の矢が立つたと…」

「やうなのよ

「ユウくんへ、助けて~」

頼み込んで来る真鍋と
俺の腰回りにしつついくの唯
…

うーむ

…断るのは不可能だな

「分かった、一緒に行つてやる」

「ホントに…?」

「ああ

「良かつたわね唯

「そんなひ、ひつひつひひひ」

「うふー。」

俺が声をかけると唯は元気よく返事をしつきだした

(アイツ、一人で行けるんじゃねーか?)

そつ思つたが声には出さないでおいつ
そつゆつて俺は元氣を取り戻した唯と軽音楽部の部室へ向かった。

「なあ、平沢…」

「な、何…？」

「いい加減俺にひりつひのはやめてくれ

「だつてだつて～」

「そりゃ嫌なのは分かるけどよ…」

唯の入部を断るために軽音楽部の部室、すなわち音楽室へと向かって歩いているのだが…

あの後、元気になつたはずの唯がまた腰へとくつついてきた。嫌なのは分かるんだが、歩きにくい事この上ない…

「ほり、もうすぐだぞ」

「へ、うふ…」

最後の階段の前に来た時、
その階段の上から若い女性教師が下りてきた。

「あ？」

「あら？」

「平沢さんね。軽音楽部なら音楽室よ」

と、その女性教師は親切に教えてくれた後、俺達の横を通り過ぎて行つた。

「よし、行くか…」

「う、うん

ビビる平沢を連れて最後の階段を登り切り
音楽室前まで来た……のだが

「ほら、ここまで来たんだから覚悟を決めろ」

「だ、だって怖い人達が出てきたらどうしよう…」

高校にそんな怖い人達なんかいる訳無エだろ…
まして、ここ元女子高だぞ…
そんな事を考えていると後ろから
唯の断末魔の叫びのような声が聞こえてきた

「ひいいいいい…！」

「おう…！」

唯の叫びは一番近くにいる俺に大ダメージを与えた

「耳が痛エ…」

「もしかして、あなたが平沢唯さん?」

「ハ、ハイ」

「入部希望の…！」

「ハ、ハイッ！」

(お前、断りに来たんじゃなかつたっけ…)

「じゃあ…あなたは…？」

セイジ、「俺は初めてその声の主と顔を合わせた。

「…？」

その女子生徒が首をかしげていた。

「あ、お前つてこの前の…えーっと…確かに『律』とか言つたな？」

「ええ！？何で知つてんの！？」

「お前」の前俺に廊下でぶつかつただろ？」

「……つあ……あの時の……」

「もううだ

「えつー…じゃああなたも入部希望って事ー!…」

「いや、俺は……」

「やつたーーー入部希望者一人目ゲットーーー!…」

「だから…」

「じゃあ、お一人さん中に入つて入つて～」

「おい…」

(このアマ、人の話を全く聞かねェな…)

つて、事で律とか言つのに半ば無理やり元部室へと連れ込まれた…

・・・・・・・・

「みんなーー入部希望者が来たぞーーーーしかも一人もーーーー！」

(いや、だから俺は違つてゆつてますがな…)

「本當か！？」

「まあ」

とか言って、一人の女子生徒が声をあげた。
つーか、部員一人？ しかいねエのか…？

「ようこそ、軽音部へ」

「歓迎致しますわ～」

「よーしムギー・お茶の準備だ！」

「はーー

俺達この状況下で入部を断れと
厳しそうな

「ああ、遠慮せずに座つて座つてー。」

「……コウくん…」

と、誰が小声で話しかけてきた。

「とつあえず、今は従つとくのが良いくんじやねエか

俺も小声で返す。

「はー、どうぞ

「……

「……

氣まずいな

つーか、何でこの三人はこんなに
近づいて来てんだ？

「おーし~

唯がそんな事を言つたので慌てて見てみると
普通に紅茶を啜つていた

(待て待て、お前ホントに断りに来たんだうつな)

「おひ～

ケーキを口に入れて満足そうに微笑む唯。
そりや、上手いんだろ？

見るからに高級そうなケーキだからな…
つーか、このケーキとかティーカップなどこれから
支給されてんだ？

「平沢さんばどんな音楽やりたいの？」

いつの間にかしゃがみ込んだ律が唯に向って聞いていた。

「え？」

「どんなバンドが好きか？」

「ええ？」

「好きなギタリストは？」

「えりと……」

「う……」

唯よ頼むからそんな目で俺を見ないでくれ

悪いが俺には何にも出来ん。

頑張れとアイコンタクトを送つてやるへりいか
すると、唯はそれを受け取つたらじく軽く頷いた。

「じ、じ、じ、」

「ジミ・ハンコックス?」

おー」「ラ黒髪何で邪魔すんだ…
つてこの子も確か律と一緒にいた子だよな?
確か澪とか言ったな…

まあ、今はソナ事はどうでも良い。

「おおー。」

(「のカチユーシャ、ホントに止めてやつてくれって)

「こええ、じ、じ

「ジリー・ペイジ?

「えああ～ー

(…駄目だな)つや

「ちがつ、じ、じ

ほら見る、唯がアホな子になつてゐるじゃねホか…

「ジロフ・ベック!?

お前もいい加減唯にしゃべらせてやれよ…
人の話は聞くモンだぞ。

「そつかあー・ジェフ・ベックかあー！」

「どなた？」

「ロックギタリストにも一種類しかいない
『ジェフ・ベックとジェフ・ベック意外だ』って言われている
常に新しいサウンドを追求する挑戦的なギタリスト！」

「まあ」

「さつすが渋いね平沢さん！」

「あはっ……まほほほ……」

「じゃあ、君は…」

「俺か？俺は川霧雄河だ」

「じゃあ、川霧くんはどんな音楽がやりたいの？」

（やっぱ、俺から言つしかないか…）

「盛り上がってるトコ悪いんだけど俺、入部希望者じゃねーからな」

「」「」「」

三人が固まつた
恐らく30秒くらい固まつていただろ。
硬直が解けるとすぐに

「　「　「ええええーーー?」

「うむむ……」

「だつてだつてさつき入部希望つて

「ンな事言つてねエゼ…」

「…あ

しばし考えて思い出したらしい
その声を聞いて澪つて子が律に聞いた。

「ハイ、イッテイマセン♪テシタ

「律、本当なのか?」

「つ、つ……！」

「スミマセンシ……！」

「あの～～めんなさい、無理やり引き込んでしまって」

ムギと呼ばれていた子が話しかけてきた。

「いや、一応俺ものぞきに来るつもりだったから……ハイシの付き添
いで……」

「つて、君確かこの前俺の生徒手帳拾ってくれたよね？」

「？……ああ、あの時の……」

「あの時はサンキューな」

「いえいえ」

そんな話をしていると

「つひどく叱られたらしい律が今度は唯に話しかけた

「でも、平沢さんが入部してくれてよかつたな」

「一週間以内にあと一人集まらなかつたら廃部になる所だつたんです」

…?

今なんつた？廃部？

つてことは俺等は断りに来たんだから…

「ホンシトにありがとう」

(滅茶苦茶言い辛いな)

唯の奴ホントに言えるのか?
そんな疑問が頭をよぎった時
唯が勢いよく立ち上がった。

「あ、あのつー。」

「「「ん?」」」

と、三人が首をかしげる。

「あのつ、申し訳無いんですけど
実は入部するの止めさせて下さって言つに来たんですー。」

「へ?」

律が拍子抜けな声をあげた。
だが、唯が続ける。

「ギターは弾けないし、もつと違う乐器をやるんだと想つて……」

「じゃあ、何なら出来るの?」

そう聞いたのはムギと呼ばれていた子、この前生徒手帳を拾つてくれた子だ。

「カスターは、ハーモニカ!」

カスター?
あ、カスタネットか…
絶対コイツ見栄張ったな…

「あ、ハーモニカならあるよ。吹いてみて！」
「いめんなさい、吹けません…！」

だから、見栄張るなってのに
つーか、何でコイツはハーモニカなんて持つてんだ？

「でも、うちの部に入ろうとしたって事は
音楽には興味あるってことよね？」

「他に入りたい部とかあるの？」

と澪&ムギが聞いた。

「う、うう、特にね…」

すると、三人がアイコンタクトをし始めた。

(書類を渡すんだ? ハイシ(驚))

「本當にいじめんなとこ……じゃあ行け」ハコロベ

「あ、あ」

「ああ、ひまつと待つてー」

「まつ、一杯お茶いかが?」

「でも……」

「クッキーとマーブルームもあるのーーー。」

「うさぎ」

今度はムギ&律コンビで食い下がってきた。
つーか、餌付けたな…

・・・・・・・・

「おいし~」

結局、唯が誘惑に負け残るハメに…

「はっ、すみません。こんなに御馳走になるつもりじゃ…」

唯が謝る

「いいのいいの

「川霧くんもどうが

と、ケーキが差し出されるが俺は食べる訳にはいかんだろう。
そもそも、入部希望でも無いし…

「いや、悪いから遠慮してくれよ」

「そんな事言わずに食べてみなつて」

と、律が促す

これは、食べなきやいけない雰囲気だな。
仕方なく、ケーキを口に運ぶ。

「つか…」

「だひーー！」

いや、冗談抜きでマジで美味しい

恐らく幸治の作る菓子とかより美味しい
あいつも一応親父さんがパーティシエただけあって
洋菓子を作るのはかなり上手い方ではある。
だが、このケーキはそれ以上に美味かった。

「毎日」いつも一緒にお菓子を食べましょう

(それは部として駄目じゃねェか?)

と突っ込もうかと思ったが場の空気を壊しそうなので止めておいた。

「何か趣向が違つてきて…」

ガンッ!

「~~~~ツ

「…？」

なんか、スゲエ音が聞こえた。
ンでもって、なんか澪が悶えている

(今一體何が起きた?)

そんな事を考えていると律が再び唯に話しかけた。

「平沢さん、他にはどんなものが好き?」

「んー、美味しいものなら何でも

一瞬、律が固まつた気がした。

「家では休みの日とか何して過ごしてんの?..」

「ハロハロ...かな」

「好きな物とかある?..」

と、今度はムギが聞いた。

「可愛いものが好きかな

「苦手なものは？」

「暑いのも寒いのも苦手なんだ～冬はコタツに籠りつきりだし～夏は床の上を転がつてばかりいるの～」

(スゲエ生活だな、まあ俺も暑いのも寒いのも嫌いだけど)

今の発言で二人全員が黙った。

そりや、やつだらうな

これ言われたら他に何も言えないだらうよ。

「あ、あの～…じゃあ

話の区切りがついたので席を立つ唯一
それにつられて俺も立ち上がる。
だが…

「ああ…行かないで…お願ひ…！」

「『ロロロ』じてんだけで良から～！」

「もっと美味しいお菓子持つてきますから～！」

（ケーキとか持ってきてたのお前か）
と、今はどつでも良こよつた事に納得した俺。

「…」めんなさい、軽い気持ちで入部するなんて書いたから
期待させるだけさせて…なんて謝つたらいいかあ～～～

「うわ

（マジかよー？泣き出しちまつたぞ！？）

これって、俺がどうにかしなきゃいけないのか！？
しばし考え、俺が取るべき行動が決まった。

「恥ずかしかつたが平沢の頭に手を乗せてなでてやつた。
それぐらいしか、俺の頭は回らなかつたからだ…」

「う、グスツ」

と少し泣きやみ始めたので
他の三人にアイコンタクトを送る

（お前ら何とかしてくれ！）これは絵的にヤバイ！！俺が泣かしたみたいに見える！！

と言ひ意味を込めてのアイコンタクトだった。

すると、運良く律が察してくれたらしく
口を開いた。

「じゃあ、せめて私たちの演奏だけでも聞いて行って
「えっ？」

(お、ナイスだ律！-反応したぞ)

「演奏してくれるのでー！」

「……」

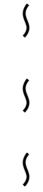
(あ、あれっ？、もう泣き止んだ？)

卅、まあ良いか…

・・・・・・・・・・・・

俺と唯は長椅子に腰掛けて三人の演奏を待った。
すると、アイコンタクトを取った三人の演奏が始まる。

「ワン・ツー・スリー・フォー！」



律たちが演奏したのは

恐らく誰でも聞いた事くらいはあるであろう

『翼をください』だった



(中々いい感じだな)

素直にそう思った。

三人しかいないのだが

でも、各々が良い音を奏でている。

＼＼＼＼

そして、一瞬のよつに感じた時間は終わるを告げる。
終わるとすぐには立上がりがった。

「わあ～」

そつ面白いながらパチパチと拍手をする

「えつへへ、えつだつた？」

と律が聞く。

俺は良かつたと思つんだが
唯はどう思つてんのかねえ？

「なんとかかす」へ言葉にしていくんだけど……」

恐らく喜んでいるんだろう
顔には満面の笑顔を浮かべ言葉を続ける。

「あんまり上手くないですねっ！－！」

バッサリだー…
……

恐らく三人もそう思つただろう。

「でも、なんだかすうごく楽しそうでした！」

「　「　「ん？」「」

「私！この部に入部します！－！」

(ええ！？マジで！？)

断りに来たはずなのに引きこまれてしまった…

：まあ、それも悪くねエだらうな。

すると、信じられないのだろうか

律&澪がお互いの頬を引っ張り合っていた。

そじて、夢でないと確信したのだろう

「バンザーイー！」

と澪に頬を引っ張られたまま声を上げる律。

そりや、嬉しいはずだ…

廃部がなくなるんだからな。

それじゃあ、これで俺のお役は御免だな…

だが静かに立ち去ろうとした俺に律から声がかけられた。

「なあ、雄河！」

「あ？」

「雄河も入らないか？軽音部ー。」

「何で？」

「きつと楽しいよ～ユウくんも入るつよ～」

と唯も声をかけてくる。

「俺が入っても大した変化はねエと思つぞ」

「それでもだよー！」

「それに人数が増えれば演奏の幅が広がるー。」

と律&唯に促される。

(でも、俺が入ったら『あの時』みたいになるんじゃないだろうか
……?)

「いや、俺は……」

「良いじゃん！..絶対の絶対に楽しいから…！」

(何でだらう俺は昔それで罪を犯した…それでも、今度は今回だけ
は大丈夫な気がする)

そこまで思つたら返す言葉なんて決まっていた。

「分かつた…俺も入る」

「ホントに!?

「マジで…？」

と律&唯が声を上げる。

「ああ、マジだ

「こやつたー！ー！ー！」

唯&律が豪快にハイタツチをする。

(早くも意氣投合だな…)

でも、この部に入つたら入つたで
騒がしそうだな…

…まあ、そんな日常も悪くねエか

「フフーン ちょっと失礼~」

と、律が長椅子に置いてあつたバックからカメラを取り出した。

「じゃあー! 軽音部活動開始記念にー。」

「ああ。私のカメラ…」

(澪のかよ)

と心中でシッ ロミを入れた。

「こっぴーんー！」

とか言いながら律がカメラを構えた。

するとすぐにパシャッとシャッターを切る音がした。
多分、俺あんまり映つてねェなとか思いながら撮つた写真を見ると
案の定

顔が若干見切れていった…

(だがあま、デコしか映つていない律よりはマシか)
と、思った。

「あ、でも私全然楽器できないし…あ、マネジャーとかどうかな？」

(こやこや、運動部じゃないんだし…)

「いや…運動部じゃないんだし…」

律が俺と寸分変わらぬツツノリを入れた…

「そうだ、この機会にギターを始めてみたらどうかしら？」

「お、良いんじゃないのやつてみるよ」

俺も賛同する。

「えっ？ でもすげ難しそうな…」

「大丈夫だよ」私たちも分かる所は教えてあげるしー。」

と律も促す。

「……」

しばし考え込んだ唯が出した答えは

「うん、そうだね。わたくしの演奏聞いてたら私にもできるかもって
思えてきた……」

「ソ、ソレハヨカッタ……」

唯、ちよつと言ひ言葉を考えてやれ
この時俺は心からそう思った

「雄河もどりうだ?ギターやってみるか?」

と律が聞いて来た

そういうや、「マイツ等にまかれて無かつたな……

「あ、あ、俺ギター弾けるからな」

と叫んでいた

「マジでー?」

「ああー」

「えーー?」

「えーー?」

と叫んでいた。
そんなモンかな……
あ、そんな反応をした。

「だから、平沢がギターをやるってんなりある程度教えられるぞ」

「おお～スゲ～強力なメンバー加入！！」

「そんなんに、期待するなよ？」

と、調子に乗った律を抑え
若干不安ではあるが
俺の新しい軽音部での高校生活が始まった。

十話（後書き）

やつと軽音部始動です！！

ここまでだけで凄く長く感じた黒翼でした…
と、ああそんな事は置いておいて

次回は、唯とギー太との出来事を書いつと感ここもか！
では、皆さんまた次回お会いしましょー！

八話（前書き）

今回から少しづつ雄河の過去を明かしていくつもりと思こます。

しかし、非ツ常に私事ではあるのですが

通っている高校のテスト期間中なので今回は

だいぶ短めです（汗）

本当に申し訳ござりませう…。

軽音部に入部してから早くも一週間がたつた。
だが、俺の生活には大した変化がなかった。

そもそもどうだろう、部活に行つても基本的にはムギの持つてくれるケ
ーキなんかを

食べて、話しているだけなのだから…

しかし、本日俺は帰宅している事はしているのだが
四人の女子（軽音部メンバー）を引き連れている。
何故かというと長くなるのだが

唯の「ギターを触つてみたい」の発言によつて全てが始まった。
その発言に対し律が俺の持つていてるギターを触らせてやれと言い始め
断つた事は断つたのだがエンジンのかかつた律とそれに便乗した唯
を止める事は出来ず

今に至るつて訳だ…

「どうあえず上がつてくれ…」

「「「お邪魔しま～す」「」」

(とりあえずリビングにあげるか…)

そう思いリビングのドアを開けると…

「あ、雄河、お帰り～」

とか言いながら姉貴が声をかけてきた
と言つたか唯達に会わせたくない人物がいた…

そのため俺が取るべき行動は一つ…

バタン…

「ソビングからの退却…」

「とつあえず俺の部屋にあがってくれ…」

「バンッ！」

姉貴が思いつきつドアを開けて出てきた。

「ちよっと、雄河なんでスルーするのー…つて、あらう~む友達?..」

「部活のな…」

「 「 「 「お邪魔しまーす」 」 」

と四人が口をそろえて挨拶した。

「はい」

姉貴が反応する。

「とつあえず俺の部屋にあがってくれ

立ち話をするのも何なので俺の部屋に入れることにした。

・・・・・・・・・・・

「よし一つ聞くぞ? 何でアンタまで入つて来てんだ?」

「いいじやない、雄河の友達がどんな子達かみたいの?」

「…面倒臭エ」

「セーヒー…あからさまに嫌な顔しない!」

「茶でも淹れて来るからちょっと待っててくれ……」

「無視しないつー！」

「…………

バタンツ

・・・・・・・・・・・・・・・・

雄河がお茶を淹れに台所へ戻つて行つたので
雄河の友達たちに一つ聞きたい事を聞いてみた。

「ねえ、あなた達」

「「「「はい?」」」

四人が同時に反応した。
息ピッタリね。

「（）めんね、ひとつ聞きたいたがあるんだけど……」

最初は聞けつか悩んだ…

でも、いつでもしないと雄河が前へ進めない気がした。

「 「 「 「なんですか?」」

「雄河、あなた達の前で笑つたり…した?」

雄河には悪い気がした
でも、仕方がない。

「いえ

「ううう

「笑つてないです」

「確かに笑つて無かつたな」

やつぱりだ、恐らくそうだらうとは思つていた。
しかし実際に聞いてみると少し辛い…

「やつぱりね…」

「やつぱりつて?」

カチュー・シャが特徴的な女の子が聞いてきた。
やつぱり、話した方がいいよね。

「それは多分…まだ雄河があなた達に心を開いていないんだと思つ
んだ」

辛かつた…

でも…止めるわけにはいかなかつた。
彼女たちには知つてもらわなくちゃ…
これから雄河と付き合つていくな
過去を雄河を…

「どうこいつ」とですか?」

と、カチュー・シャの女の子が聞いてくる

「まあ、私は特に気にしてなかつたんだけどね」

「実は昔の雄河はね、世間で悪い不良だったのよ…」

「えつ」

女の子の誰かが声を上げた
しかし私は続ける。

「それでも、昔の雄河は良く笑っていた…これ以上無いってくらいの眩しい笑顔だった」

「じゃあ、何で？」

黒髪の女の方が聞く。

「本当はね雄河は自分が不良である事が嫌だったらしくの」

「だから、中学2年の時そんな自分を変えようと軽音楽部に入ったのよ…」

「 「 「 「 … 「 「 「

「でも、一年もしないで雄河は部活を辞めてしまった…」

「あの時の理由は、今になつても誰にも話さうとしないの私たち家族にさえね……」

「　　「　　「　　」　　」　　」

「でも、分かるのはその頃から雄河は笑わなくなってしまった…」

「しかも、それからとこつもの、雄河はほとんど友達付き合つ事を止めてしまつた」

「せうだつたんですか…」

カチューシャの女の子がつぶやいた。

(あ、ちょっと雰囲気暗くしちゃったかな?)

「でもね、高校に入つてまた軽音部に入つたつて聞いて私はびっくりしたわ」

「…あ」

「それで私は思つたの…あつとあなた達なら」

「雄河の抱える『闇』を何とか出来るんじゃないかなって」

「だから、雄雅と付き合つていってもし雄河が少しでも笑つたなら」

「それは、あなた達に心を開いた証拠だと思つ……」

「だから、その時は雄河の力になつてあげて」

「そして、昔の事も聞いてあげて欲しいの……」

四人はしばしうつむいた後、
顔を合わせて笑顔を浮かべながらこう言つた

「「「「「まこ」」」

「うそ、ありがとう…雄河の事よりしへね

「「「「「まこ」」」」

(せつと、)の子たちなら雄河の抱える物をどうにか出来る
彼女たちの笑顔を見て私は、その時そう確信した。

（）すとトントンシッヒ階段を上がってくの足音が聞こえた。

「これで、私の話はおしまい……聞いてくれてありがとうね

そう言い残し私は雄河の部屋を後にした
…

八話（後書き）

今回は少々シリアス回にしてみました。

雄河の過去、そして闇、それを表現出来るかが心配です（汗）

次回はすぐに更新できると思います。

それでは、次回またお会いしましょうーー！

九話（前書き）

前回の投稿から時間がかかってしまって申し訳ありません（汗）

今日やつとテストから開放された黒翼だつたりします…

なので、今日からまた投稿に励みたいと思います。

それでは、前置きが長いのもあれなので

わいわい、じりじり！

「ン…」

朝になつたらしづ田が覚めた…のだが

「はあ…ダリイ…」

憂鬱である、實に憂鬱である
何故かつて…？

簡単に言えば睡眠不足だから。

昨日、唯たちが来た後の夜（深夜一時位だつたと思うが）
何故かMAXテンションの幸治から電話がかかってきて
一晩中、アソツの自慢話に付き合わされるという悲劇が起きた。
時間にして約三時間…
誰でもこうなるに決まつてゐる

「あ、学校…」

時計を見るともう九時を回っていた…

今から、ダッシュコド行つても

九時十分位だらう…

故に走るなんて無駄なことはせずにのんびりと…

。。。。。。。。。

電子音が鳴り響いた

一応言つておくが目覚ましとかではない…
では、何かとこうと…

『あ、もしもし? ュウくん?』

「...誰?」

今だから言えるのだが
俺のことをユウくんなんて呼びやがるのは
たつた一人しかいなかつた...
』

『もう~私だよ』

「あ、平沢か...」

電話の相手は唯だった

「何か用か？」

『もう、何で学校来ないの～？』

あ、そういう事か

オーケー、納得いった。

つまり学校が始まつてんのに俺が来て無いから
電話をかけてきたと

「悪いな、それで今そつちに幸治いるか？」

『うん、こぬけど…幸治くんがどうかしたの？』

「……いや、何でもねH…」

どんだけ、タフなんだあいつせ…

『……といひで、何で今日来てないの?..』

と、唯が再び疑問をぶつけてきた…

「とある輩のおかげで寝過し」したんだよ…」

『へ』

「気にすんな……」(うのあだ)

「じやあ、今から行くわ

『ホントー?』

「嘘言つて何の意味がある?」

『わかったー。じゃあ待ってるねえ～』

そういふと終えると電話が切れた。

(それで、じゃあ行きまですか)

そう思いベットから立ち上がった。
とつあえず、着替えて

洗面台へと行き髪型を整えリビングへ…

「…誰もいねーし

誰もいなかつた

いつもは母親もいるはずなのだが

「あ？ 手紙か？」

テーブルの上に手紙があった
そこにはこう書かれていた

『雄河へ

少し友達の家に遊びに行って来るので
遅刻せずにちやんと学校行きなさいよ～』

「スマンお袋、すでに一ヶ月守れてない…」

もう、遅刻している…

ということで残りを達成すべく
朝食をものの五分でたいらげ

学校に向かうべく玄関のドアを開けた…

後書き 短くてすみません（汗）

十話（前書き）

お久しぶりです（汗）

ちよつと今まで学校の行事にでていた黒翼です。

ガラツ

「……」

(何で誰もいねエンだ?…)

学校に着いたので教室のドアを開けたのだが
…誰もいなかつた
今の時間帯は
どこも授業中のはずだ
ふとそう思い

授業連絡の黒板に田をやるとこいつ書いてあつた

『家庭科調理実習

持ち物

マスク・エプロン・三角巾 備考

調理実習十分前には

調理室に集合するよつに

だそだだ

今は家庭科の授業中の様だ

(面倒臭エしサボるか…)

そんな事を考へていると…

ガラッ

と、教室のドアが
開け放たれた

「あ？」

サボろうという夢が打ち砕かれたため
若干イライラしつつ
入口の方に目を向けると…

「は？」

…誰もいなかつた

確かにドアは開いてはいるのだがそこには誰もいなかつた

「何だ？ イタズラか？」

一瞬そんな事を思ったが
すぐにそうではないと知る

「ゴウくんーーー！」

「おおう…」

耳元で誰かが叫んだため
聴覚が一時的に使用不可につーか、どんだけすばしっこいんだよ…
ネズミかつづーの

「ゴウくんーいつ来たのー?何で遅かったのー?」

「スマンな平沢
今の俺にはお前の
マシンガントークに
ついていくのは不可能だ」

声の主は他でもない
唯であった

「いつ来たのー?ねえーーいつ来たのー?」

話し聞けよ…

「つこわつや
来たばつかだ」

「やうなんだ〜！
じゃあ今から家庭科の
調理実習があるから
一緒にこじりつ？」

全く、サボるひつと思つてたのに…

(…それも悪く無いか)

「〜解…じゅあせつやと
行くや」

「さう」

(つーか、何でロイツは教室に来たんだ?
まさか、サボるひつと思つたとかじやねえだらひつ…)

「そりゃお前は
何で教室に来たんだ?」

「あ、そういう私
エプロン忘れたんだつた」

(コヤツらしい理由だったな…)

「なら、早く取つてこよ
待つててやるから」

「うそ」

トトロ

と駆け足で自分の席に戻り

Hプロンを抱えた唯が戻ってきた。

「お待たせ」

「ンじゃ、行くか?」

「うんー。」

唯の元気な返事と共に
俺達は教室を後にした。

十話（後書き）

今回も短くないでしょ。申し訳ありません（汗）

次回はよろしくお願いしますーー。

+ 一話（漫畫也）

本田：一回皿の更新ですかーー。

まあ、前置きもだいだいやつこなとアレなんで

もうノーベルハズ。

十一話

「ダリイ…」

帰宅途中でもあるの
ものすいへしへー…

あの後、

家庭科室に行き

後に先生にひびく怒られた…

「諸悪の根源つて幸治じゃねーか…」

そんなことをずっとと考えながら
現在、帰宅中である。

「近道して帰るか…」

家に帰るには大通りを通ればつくのだが
路地裏の道を通ると若干速くつくるのだ。
そう思い、路地裏に入ったところで
誰かの声が聞こえてきた。

「……トセコシ…」

「あ?..」

(なんか女の子の声が聞こえんな…)

そんなことを考えて歩いていると
女の子の声が次第に大きくなり
何を言っているのか聞こえてきた。

「やめて下さいッ！！」

どうやら数人の女の子の様だった
で、それがよくマンガに出てきそうな
不良グループに絡まれていた。

「いいじゃん、ちょっと遊ぶだけなんだからさ」

(つたぐ、この手のバカは何で「うひじやうひじや」と)

見たところ男の人数は七人くらい
そんで、女の子の人数が三人…
故に彼女たちが逃げ出すには
陸上部でも無い限り不可…

「何でこんなトコ通りちまつたんだ…」

だが、ここまで来て見て見ぬふりはできない…
ここで選択肢が二つ

1、無視する

2、不良共を排除

……
2だな

「なア、邪魔で通れねエンだけど」

その言葉と同時に

男の一人の顔に拳を叩きこむ。

「えつ?」

女の子の一人が真の抜けたような声をあげた。

「て、テメエ！…」

別の男が声を荒げた。

「だアからア、邪魔なんだつて」

「！」のヤロオ！…」

とか言いながら突っ込んできた…

「めんどくせHなア」

男の人に絡まれて困つていたら突然別の男の人の声が聞こえてきた。

「なア、邪魔で通れねンだけど…」

その方向をみると、
色が抜けたような独特な白い髪の
男の人気が立っていた。

その瞬間、目の前にいた男の人気が吹き飛ばされた。

「え？」

つい、真の抜けた声をあげてしまった。
何が起こったのかが理解できない。

「い」のヤロオ！――

ボーッとしていると
別の男の人気が走りだした

「めんどくせ」なア」

白髪の人気がボソッとつぶやいた
その瞬間走つて行つたはずの男の人気が
叫び声をあげた。

「いでえええええ！――」

そう、叫びながら自分の腕を

押されて倒れ込んでしまった。

(一体何が起こったの?)

「おい、テメエ等」

と、その白髪の人はまだ私たちを囲んでいる
男の人たちに向かつて言った
聞いた人を一瞬で震え上がらせせるような
トーンでそつと

「コイツみてエになりたくなかつたら
2秒以内に俺の視界から消え失せろ…」

直接言われてなくとも怖かつた。

「おい…逃げんぞ…」

そう叫んで残りの男の人たちは逃げて行ってしまった。すると白髪の人ボソッと呟いた。

「はア…へつだらね」

と言つと、私たちの横を通りすぎて行つてしまつた。

「あ、ちょっと!」

「梓!?」

「どこ行くのー?」

「『めん!先帰つて!』

友達には悪かつたけど

そう言い残して白髪の人を追いかけた。

雄河 side

「くつだらね…」

面倒な奴らを追つ払つたが

もつと、面倒なことになりそつた

「あのつー!」

先ほど助けた女の子の一人が
追いかけてきていた。

「あ？」

「あの、その…」

なんか、言いたそうにしていた
多分お礼を言いたいんだろう

「別に礼なんて言わなくて大丈夫だぞ」

とりあえず、助け船を出してやった

「えつ、でも…」

「俺はただ道を塞いでた邪魔物を排除しただけだからな
礼を言われるような事はしてねエホ」

実は助けたなんて聞える訳ねエしな...

「いえ、でも助けてもらつたことは変わりありません!」

「なら、その気持ちだけで十分だ」

しかしあんまり効果がなかつたようだ...

「」の後時間ありますか?」

「おー、俺の発言に対する応答は無しか?」

「とにかく、時間ありますか?」

なかなか頑固だなこの子…

「まあ、あるけど…」

「じゃあ、行きましょう…」

そういうと彼女は俺の腕を掴んで引っ張ってきた。

「うー、おこ引っ越しんなー…そして俺をどこに連れてこへえだー?」

「夕食でもいい一緒に」と

「結構だー!」

「良いですかから来てくださいー。」

梓 side

やつと、白髪の人を説得して
ファミリーレストランへとやってきた

「で、俺をとつ捕まえて何をする気だ?」

「ちよつと、聞けが悪いんですか？」

「とつあえず、俺を捕まえた理由は？」

「お礼をしようかと思つて……」

「で、フアミレスに入った理由は？」

なんかわざわざと不機嫌そうだな…
気分悪くしたやつたかな…？

「…もしかして、怒りますか？」

「あ？」

「だって、無理やり連れて来ちゃったし…」

「…いや、別

（良かつた…）

「あ、そつだお名前なんて言ひこんですか？」

「俺の名前？川霧雄河だけビ」

「私は中野梓です」

「ふーん

(う、話が続かない…あつ、そつだー)

「な、なんて呼べばいいですかー?」

「まあ、まあ難なト」で雄河で…

「……」

私が口上もつてたから

「は、ハイッ！？」

「なあ？」

「……」

「ああ、まづいよ…
私から誘つてるのに…」

「？」

雄河さんが話し始めてくれた。

「オマハ君、何でそんなに堅くなつてんの?」

「えへ、こやその……」

「ソレまで連れてきた時みたべフジー」「器や皿、じょん

…やうだよね

助けてもらつたお礼を言つためだけで来てもらつたわけじゃないし普通に話しても良いんだよね。

「あ、ハイーーーんこやその…」

「ああ、アハーン……」

「じゃあ、ひとつ聞きたいんですけど」

「つかり話を振るのがマナーだよね

「なんだ?」

「雄河さんの髪つて染めてるですか?」

「いきなりソ」「か」

あれ? 聞いちゃ マズかったかな?

「あ、嫌ならしいんです!」

「いや、別に嫌つて訳じや無いんだけどな
俺の髪は何でか知らねエけど
生まれ付きてるといふなんだ」

「親御さんの遺伝とかではないんですか?」

「ウチの家族は全員粉つことなき黒髪だ」

「じゃあ、何で？」

「知らん」

「ええー！？」

反応早いな

うーんと他には…

何を話せばいいかな？

「あ、あの」

とりあえず話すことが決まったから
話しかけてみた。

「あ？」

「携帯番号教えてもらつていいいですか？」

「何で？」

「助けて頂きましたし、せつかく知り合つたんですし」

「あつそ」

そう言いながらも携帯を出してくれたので
私もあわてて自分の携帯を取り出す

（　）（　）（　）

番号」とアドレスを交換した後

一番気になっていたことを聞いてみた?

「あの、その制服って桜ヶ丘高校ですよね?」

「あ? そうだけど?」

「あのどんな高校ですか桜ヶ丘って!?」

私の第一希望の学校だったから
ついつい、声をあげてしまつた

「ううい、ボリュームを下げる…」

「あ、すみません…」

雄河さんに注意されてしまつた…

「桜ヶ丘ね…まあ、女子が滅茶苦茶多い」

「やうじえは去年まで女子高でしたしね
あれつ?って事は雄河さんって高1って事ですか?」

「やうだな?」

「ええー?」

「おお、…なんだよ？」

「いや…明らかに見た田が画3இへりこだつたもので…」

「セウニヤ、オマエは? 中1?」

「違うまよーーー！」

また大声をあげてしまつた…

「私は中3です！…」

「…声がだけ…つて中3…？お前が…？」

「そこまで驚かなくても…」

「オマエ明らか見た目小学生から中学一年生だぞ？」

「そんなに…？」

若干、ショックだった

小さいことは前から分かつていたけれど
そこまで言われると若干…というか

かなりショックだった

・・・・・

雄河 side

ツインテ娘、こと中野梓に連れられてファミレスに入り少し話をした後夕食を摂った。

「ンじゃあ、とつあえず飯も食つたし帰るとすつか?」

俺からそうこうと

中野は「そうですね」と言こ席を立とうとする
「あれ?」「と弦いた。

「どうした？」

「会計のレシートが…って、あー？」

「あ？」

俺がレシートを持つてないことに気が付いたのだ。

「私に払わせて下さるよーー。」

「いや、ダメだ」

「何ですかーー？」

「男が年下の女の子に払わせる料金にはいかん」といういながら手をパタパタと振り始めた。

「男が年下の女の子に払わせる料金にはいかん」

「でも……」

「良いくから」

そう言い結局俺が会計を済ませた。

帰り道中野が唐突に話しかけてきた

「あの、今日はほんとこありがといひやれこまつた。」

「どひした? じきなつ?」

「いえ、ほんとこ今田せー」迷惑をかけてばかりで

「気にすんなつて俺は道を
通りたかつただけだつて言つてんだろ?」

「とにかく、あつがどひやれこました…」

「まあ、気持ちは受け取つておく

「やつこえは雄河さんの家つてどーなんですか?」

と中野が聞いてきた。

「かうべやま

「えー?」

「どうした?」

何か知らんが突然中野が声をあげた

「私の家もすぐそこ」なんですねけど…」

「どう?」

「あの、角の家です」

「……」

「…どうしたんですか?」

ちょっと待て

頭の中、整理すつかひ

.....

……マジかよ

「俺の家…オマエの家の二つ隣なんだけど…」

「えええええええええ…！…！…？…？」

いつして、初めて中野が近所様だと知った…

十一話（後書き）

今回は少し雄河の過去と

梓との出会いを書いてみました。

次回もできるだけ早く更新します！！

それでは……それではッ！！

+ 1話（前編）

とつあんすアーメの2話、樂器一の前半をお送りします。

それでさびひー。

「それでは、これでホームルームを終わります」

：担任の長ツたるいホームルームが終わり
昨日の中野との一件のせいでもともに疲れなかつたため
現在睡魔と戦闘中なのだが
よつやくその戦いに終止符が打たれた。

「帰るか…」

部活があつたはずだが
面倒だつたので帰ろうとした
…が

「コウくん」

「あ？」

帰るために立ち上がりつつと思つた時
不意に誰かから声をかけられた。
まあ、唯なんだがな…

「部活に行こう。」

満面の笑みで俺に向かって
話しかけてくる唯、
ただ、ひたすらにダルそうにしている俺。
距離は一メートルも無いのに
温度差が北極と砂漠くらいあった。

「面倒だからバス…」

「 めーし、行け。」

「.....」

昨日の中野といつもいっしょに
何で俺の発言はことじが」とベスルーセレンだよ
そんなこんなで若干イライラしつつ
唯に促され部室前へとやつてしまつた。

「はア……開イ……ダリイ……しんどい……」

「あ、北川さん。ため息してると幸せが逃げちゃうみたい。」

「うへへ幸せなんぞ逃げてはるの……」

マイシに捕まつてひじき連れていた母娘で
完全につこつね……
はや……家帰つて寝て……

「～おひでる」

「……」

またも俺のセリフ、ガンスルーで唯が
部室のドアを開け放つた。

「よつー。」

そう言つて最初に声をかけてきたのは
軽音部の頼れる? 部長、ドラムの『田井中律』だった
愛称は『りつちゃん』だそうだ

「ひんにちわ

次に声をかけてきたのは
相変わらずお高そうなティーセットを運んでいる
キーボード『琴吹紬』、女性陣からの愛称は『ムギ』らしい

「ひざひわ

ラストはお姫様カット?って言うのだろうか?
長い黒髪が特徴的な、ベース『秋山澪』
愛称は…よく分からん…

「おっ、ゴロもーおーっす」

続いて入ってきた俺にも声をかけてくる律

「川霧くん、こんにちわ~」

ムギも声をかけてきた…しかし

なぜか、澪だけはなんかモジモジしていた。

「…？」

俺が不思議そつな顔をしてみると誰が澪に話しかけて行った

「じつはいたの澪ちゃん？」

「い、いやでもない…」

「？」

続いて唯も不思議そうな顔をした

(どうしたんだ? 霧の奴? まあ正直言つてどうでもいいけどな)

「どうして、何で澪ひやんはギターじゃなくてベースをやりたいと思ったの?」

…話の流れをぶつた切つて唯が話始めた。
いや、別に問い合わせるつもりはないんだけどよ…

「えつ? …アーン…だってギターは…は、恥ずかしい…」

「は、恥ずかしい?」

(何で? 恥ずかしい?)

理解できなかつた。

結構長い間やつていうとはこえ

別に俺も始めた当時恥ずかしいなんて思つたこと無かつた。

「ギターついバンドの中心つて感じで先頭に立つて演奏しなきゃいけないし

観客の田も自然と集まるだら?...自分がその立場にならひて考えただけで…」

ボウンシ…!

「み、澪ちゃん!…」

「…どうした？」

「大丈夫？」

澪の頭から蒸氣みたいなのがでた…

しかもかなり勢い良く…

倒れそうになつた澪をムギがすかせずフオローする。

「ムギちやんはキーボード上手いよねキーボード歴長いの？」

一段落ついてから今度はムギに同じような質問をした。

「私が四歳のころからピアノを習っていたのコンクールで賞を貰つたこともあるのよ？」

ヒ、ムギ…

…「コンクールで賞を貰つた?

どんだけ上手いんだよ…

つーか、なら何故軽音部に入つたんだ?

「へー?へえ~, すゞこねえ~.」

唯が感心したような声をあげた。
まあ、俺も同感だ。

「ああ、頂きました!」

例について

机の上にケーキや、クッキーが並べられた。

「つーか、ここ、軽食部のはずなんだけどなあ…見ただ明らかにどうぞの喫茶店だ…」

「そういうえば、ずっと疑問に思ってたんだけど

この部室ってやけに物が揃ってるよね？」

最近の高校ってこんな感じなのかな？」

と唯が疑問に思つたんであわてて口を塞いだ。

でも、そういうやうだな…
ティーカップとかな…

「ああ、それは私の家から持つてきたのよ」

「自前ー?」

「マジかよー?」

「はいっ」

何だ? コイツの親はどこぞの大企業の社長か?
しかも、かなり高そうなティーカップだしよ…
すると、硬直から溶けた唯が律に話しかけた。

「つつかやんはドリームって感じだよね」

ああー…何か分かる気がする…

話し方とか仕草とか見ても男みてエだしな。

だが、本人曰く：

「んなつ！？ 私にもちゃんとすゞ」—く立派な聞けば誰でも感動する理由があるんだぞ！？」

だそうだ、まあ俺には
そうは見えないんだがな…

「へえ～…どんなどんなつ？」

唯が律に向かって
知りたそうな顔で問う。

「それはっ！」

「ん~?」

「え~っと、あれだ…カツ『いいから…』

やつぱりな…

明らかに虚勢を張つてゐるよ!うしが
見えなかつたからな。

「ヤバ?」

唯も若干がつかりした感じで呟く。

「だ、だつてやー」

と、律が言い分を述べ始めた。

「ギターとかベースとかキーボードとか！
指でぢまちまちまちまするのを想像しただけで
～～～～ツ！…！…つくなるんだよーー…はあっはあ…」

「じんだけだよ…

別にそこまでぢまちまはしてねエビ…？」

「ハハハハゼビハシギターやハヒタリたの〜。」

三人に聞き終わったので最後に
俺に唯が問うてきた。

「まあ、ギターを貰ったのがきっかけといえばきっかけかな？」

「へえ～、誰からもらひたの？」

「あんま詳しくは覚えてねエけど…確かに親父の友達のミュージシャンだったと思つ」

俺も正直小さかつたから詳しくは覚えてはいなかつた。
まあ、貰つたのが十年前だからな…

「　「　「　ええー?」　「　」

「つて、何だよこなりテカイ声出しつ？」

他の四人が同時に大声をあげた。
何だ？俺、変なこと言つたか？

「ハウのお父さん//コージシャンに友達いんのー・？」

いち早く硬直から解けた律が驚きながら聞いてきた。

ああそういう事ね…
ミコージシャンの友達がいるつて
普通じやねエもんな…

「まあ、昔の同級生らしこけど」

「那人からもらったギターって？」

続いて澪が硬直から解けたらしく勢いよく聞いてきた。

「ああ、ポール・ワード・スミスPRSって知つてつか？」

「えっと確かにチャーダ・ウイリアムスが使ってたギターだよな？」

流石、この中で結構真面目そうな奴ただある

「まあ、そのあたりが有名かな？」

「そのギターつていいくら位するの？」

どうなんだろ？

貰つてからそんなこと考えたこともなかつたな
そういうや俺、今日ギター持つてきてたじょん

「分つかんねHけど…じゃあ、見てみるか？」

「持つてきてんのー？」

とか、言いながら律が話に入ってきた。

「あ、あ、ちよつと待つてくれ」

そう言つて、部屋の隅に置いておいたギターを取りに行つた
次いでケースから出したそれを澪に手渡す。

「結構重いね？」

「まあ、女にとひはせんかもな」

「うーん私じゅうぶんか分かんないな」

流石の澪でも分かんなかつたか

まあ、別に金額なんて分かんなくても特に問題ねHしな

「アリだー。ゴウヘニー。」

「何?」

「弾いてみてーーー。」

「何でお前やんなにテンション上がってんだ?」

「アリだよ、弾いてみてーーー。」

と
涙

「持つて来たんだから弾いちまえよ～」

と
律

「私も聞いてみたいですよー！」

七
ノ
ト

：別に断つてはいねエンだけどな

「別に良いけどよ……」

全員に促され
ギターを弾くことになった。

まあ、別に嫌じゃねえんだけど
何というか滅茶苦茶見られてるんだけど…
何しろ、ほんとに一メートルも無いくらいの距離感である。

「なあ」

「なに?」「なに?」

「近エ んだけど…」

と、四人を抑え

ギターを弾き始める。

（　）

何か懐かしい感じがした…

昔の頃の事がフラツ・シユバックの様に

頭に流れん込んで来た

でも、あんまり思い出したくない

事まで思い出しちゃった…

）　）　）

でも、もつあんな事にはさせないと誓った

）　）　）

そつこひしてゐる内に
ギターを弾き終えた。

「　「　「　…」　」　」

と四人がまったく反応せずにボーッとしていた
…つーか、大丈夫かコイツ等？

魂でも抜け出たんじゃねーカ?

そんな馬鹿なことを考えていると

一番最初に正気に戻つた律が声をあげた。

「う、う、う、」

「あ?」

「うめえーーー!」

「おま、ひ、何だよこやくなつ……」

すると律の声で三人も正気に戻る。

「す、Jーいー川霧君ー上手ー」

「凄い…」

「何かよく分かんないけどす、Jーく格好良かつたよーー！」

と、各自から感想が述べられる…
つーか、唯…よく分かんないって…

まあ、正直嬉しかった。

「まあ、ありがとう

素直に思つたことを述べてみた。

その後の会話はあんまり関係無さそうだったので
俺は机に突つ伏して睡眠をとった

十一話（後書き）

読んで頂きありがとうございます！

次回もできるだけ早く更新します！！

後、感想なんかも待っています！！

十三話（前書き）

前回の続きです！

ԵՐԵՎԱՆԻ ԱՐԴՅՈՒՆ

「はあっはあっはあっ」

息を切らしながら商店街へ全力疾走中、先程の電話の内容を脳内で整理していた。

さてさて、何で俺が全力疾走中なのかと云つと、10分程前に遡らなければならぬ。

……………シルバーパンクシルバーパンクシルバーパンク

「ン？ ああ？」

携帯の着信音で田中が覚めた……

本日は週末の土曜日、故に早く起きる必要はないはずだ……
だがまあ、電話に出ない訳にはいかない訳で……

「…………あ？」

とつあえず仕方なく受話器に耳を当てる。

「おっ、やっと出た。」

「お~こ~う、何で来ないんだよ」

電話の相手は我が軽音部の部長、田井中律であった……

「何だよ朝っぱらから…んして来るつ~ビニ~」

「商店街に決まつてんだろ？」「

「何故？」

律の言葉の意味がさっぱり分からなかつた。

「商店街に来い」？？何故？

「何故つてこの前の部活で言つただろ？」「

「全くこれつぽつちも聞いてねんだけど？」

「いや、私言つたんだけど……」

俺確かあん時寝てたな……？

「……」

「その時……」

「弾いたな

「この前、コウがギター弾いてくれたじゃんか？」

律の声のせいで頭がガンガンしている中
言われたかどうかという事を脳内で検討していた。

「……」

「了解しました部長。で、今から俺はどこに行きやがいいんだ？」

「お、来る気になつたな～？じゃあ、今から商店街の入り口に来て」

「了解…」

ピッ

携帯を切り

ベットから起き上がりながら
氣ダルイ体を引きずつてリビングへ…

「あ～り雄河、今日は早いのね？」

「おまえがうらやましいなー。」

「とある会社の中心的な部長のせいだな……」

おまえの両手に返答しつつ時計を見ると十時半を回っていた。

「あら、珍しいわね? ……まあ~ん

「あ~」

お袋が意味深な顔をしてニヤけていた。

「 もうは、テートかしらね？」

「 ンな訳あるかつの…」

返答しつつ身支度を整えてこぐ。

「 あり残念」

「 ウチの部長からの呼び出しだ」

「 軽音部のお友達？」

「 ナリだよ……ンじやあ、行つてくわ…」

そう言い残し、玄関のドアを開け時間を確認
現時刻十一時三十五分…

「はあ…、仕方ねエ走るか…」

観念し、全力疾走するため軽くジャンプする。

「よし」

咳きながら、重い体を動かしながら俺は商店街へ向け走り出した。

ンで、今に至る訳だ。

「はあっはあっはあっ…」

息を荒くしながら走つていると
唯たちらしき人影が見えた。
なので、スピードを軽く落としながら
その人影へと近づいていった。

「よお…」

「　「　「　「うわあ……」「　「

あの後、唯達が大声を上げたため周りから変な目で見られながら移動するという苦行を執行しながらどうにか今に至つている。

「お前、…呼び出しだして驚いてたじゃね？よ、俺が痛い目で見られたじゃね？」

「「」「めんつて~」

律が少し申し訳なさそうに言つてきた。
まあ、反省してこんなふうだし責めるのはやめてやる。

「で、今日は何の為に予備出した？ト、うね理由なら帰るからな」

「大丈夫！…ちゃんとした理由だから…」

「今日は誰のギターを見に行いつて思つてたんだ

と、澪の補足説明が入る
なるほど…ふむ…唯のギターをね。

「了解その理由なら大丈夫だ」

特に問題なかつたので承諾する。
ここでムギが唯に話しかけた。

「せう言へば唯ちゃん、お金は大丈夫だつた?」

ああー、そうだな。

どんなギターでも金が無きゃ話にならないしな。

「お母さんに無理言つて五万円前借りさせて貰つた。」

「まあ、五万くら~あれば良いのが買えんだろ」

「うん……これからは計画的に使わなきゃ……いけないんだけど~」

「今なら買える……」

いきなり、本来の目的を見失いつつあるな……

「 ピラ ピラ 」

律がショーウィンドウに張り付く誰の首根っこを掴んで制止をかけたのだが、

「ちょっと、見るだけ~」

と、女物の服が売っている店へと入って行った。

「おこおこおー…」

俺が呆れた声を上げると

「あ…

と澪も同じく呆れた声をあげた

「じりすんだ、おい…」

初っ端から寄り道かよ

「いのん、雄河…ちょっと待つて

「了解、俺はそこの喫茶店でも入って休んでるよ

唯の事は澪に任せ俺は喫茶店に向かうことにした。
まあ、走ってきてノドが乾いてたしな

「じゃあ、また後で電話するよ」

「つよーかい」

カラソカラソツ

「こいつしゃいませ～…つて雄河！？」

「何でアンタがここにいんだよ……？」

俺は近くの喫茶店に入った……のだが、俺を出迎えてくれた店員は俺の良く見知った人物だった。

「アタシはバイトしてるだけだけど……」

「…………スマン、姉貴……帰るわ……」

「ちよつちよつとーーー！」

その人物 姉貴は慌てながら俺を引き止めた

「何で俺は外に出てまで肉親に会わなきゃいけねェんだよ？」

世間狭すぎんだろ…

「どうあれ、席に案内するから入って」

「はあ…」

とうとう姉貴にテーブルへと連れて行かれ無理やり座らされた。

「で、あんたは何でここに来たの?」

「俺が喫茶店に入ったら何かおかしいのか?」

「いや、モーグー訳じやないんだけど…」

「ただ、ちょっと時間が空いたから寄つただけだ」

「なになにってでもすんの?..」

「……はあ…………何で家人間は同じような質問をすんだよ」

「?..」

「気にすんな、じつけの話だ……」

訳が分からぬみたいな顔をした姉貴にいちいち説明するのも面倒
だったので適当に流す…

「ンじゃ、アンタの奢つでサンドイッチでも…」

〔冗談交じて姉貴に注文を入れる
すると

「はあ、今回だけだからね

姉貴はそう言い残し厨房の中へと消えていった
案外あつさつオッケー出たな…
… 駄からりの電話はまだ入らない
なら、今、寝ても大丈夫だらう…
でもまあ、メールくらい入れとくか…

『隣にある喫茶店にいるからな』

と、ちやせちやと本文を入力し、駄へと送り始めた。

れて、俺は一瞬りでもあるか…

やつ思い、俺は意識を夢の世界と飛ばした。

十三話（後書き）

次回もできるだけ早く更新します！！

感想なんかも面白かつたら気軽に書いていただいて結構です！！
ダメだしなんかでも構いませんので（笑）

それではそれではッ！！

十四話（前編）

よつやく唯ヒギー太の出来事です……。

それでは、どうぞ……。

「……河」

「……？」

誰かが俺の名前を呼んでいる（多分）
だが、眠い状態でいちいち反応するのも面倒なのでスルー…

「……ウー！」

今度は一際はでかい声で…

「ユーワーーー起きるーーー！」

つーか、この声とこの呼び方って…

「ゴー……」

「うるせーな…」

「うわー！」

案の定、律であった。
だが、周りには他のメンバーもいた。

「あー、ゴウくん、おはよー！」

「川霧くん、大丈夫？ 深く眠そうだけど？」

唯&ムギが声をかけてきた

「大丈夫だ…つーか今何時だ？」

ふと疑問に思つた事を解決すべく
店内にある時計に目をやる…

「お前等、どんだけふらついてたんだ?」

俺がここに入つた時刻は十一時五十分…
現時刻、一時十三分…
時間にして約一時間半

「いや～唯を連れ戻そうとしたさあ～
ちょっと面白そうだったから一緒に見て来ちゃつた
」

「はああああ…」

いつにも無い大きなため息が出た。

「じゃ、私たちも少し休むか？」

「そうだね~」

律の提案に唯が乗る。

「後、ちょっとだけだからユウも良いだろ?」

「…部長さんの好きにしてくれ」

「はあ～疲れた～」

そう、唯が呟いた

結局、休憩することになつたらしく

俺の座つていた席にテーブルを二つくつつけて

他の四人が座るという形になつた。

「へへ～、買つちつた～」

次に律が口を開いた。

…つーか、お前止めに行つたんぢゃねエのかよ…

ふとそんな事を思ったが面倒だったので机の上を止めておこた。

「楽しかつたですね～」

「ギギよ、楽しんじゃイカンだろ…

「次ビ」行」つか？」

唯の発言で一瞬、俺の思考回路が停止した。
……オマエ等一体今日何しに来たんだよ
そんなことを考えていると唯が続けて喋り出した。

「あれ?...何か忘れてない?」

「楽器...」

「楽器だろ、楽器」

澪と俺の声が重なった。

「おおーーしまったー！」

…じめつたー『じやねん』…

「オマエはー体今日向じに来たんだよ…」

結局、ツッコミを入れてしまつた。

「やつと着いたな…

若干、面倒ではあったが部活をやるのなら避けて通れない道だ…

【10GIA】

それが今現在、俺達がいる楽器店の名前だ。
昔、俺もよく利用していた楽器店である
別に、大した理由は無く
家から一番近いからと、その理由である。

そんな事を考えていると
いつの間にかギターのある辺りへ来ていた。

『雄河！雄河！私、このギター欲しい…！』

「ツ…」

…一瞬、昔の事が頭を過った
俺としては一番思い出したくない思い出だ。

「雄河？…どうかした？」

澪が心配そうに俺の顔を覗き込んで来た。

「…いや、別に何でもね…」

「それなら良いんだけど…」

…しまった、あんまり心配させね様にしね」と

「す、い、ギターが、いっぱい」

ギター売場へと本格的に入ったところで唯が感嘆の声を漏らした。
まあ、最初はそんなもんだろうな…

そう思い、唯が扱えそうなギターを探してみる。

「ん~…

すると、唯がいつの間にか俺の隣にあったツインネックのギターを凝視しながら唸っていた。

まあどうでも良かったので、とりあえず、他のギターを探してみる。う~む…女子が使うんだしゃつぱ軽いのが良いよな…

「ねえ、雄河

「あ?

ふと、考えに耽っていると
澪に声をかけられた?

「どうした?」

「唯が

「平沢?」

唯なら俺の隣にいたはず…

「…つて、いね」とし

隣にいたはずの唯が煙の如く消えていた。

「あ…」

澪が指差した方を見ると一本のギターの前で唯が屈み込んでいた。

(…あこひはネズミか)

「で、誰がビビった？」

「ちよっと来てくれないか？」

「？」

訳が分からなかつたのでとりあえず遼に着いて行くと
遼が俺を呼んだ理由が分かつた。

「ちよっとおのこね、アハハ！」

律が唯を促そうとしているが

「ほえ？…ん、うーんやっぱこれが良いな…」

そつ言いながら唯が見てているのは
赤いボディのとあるギター…

「ギブソン・レスポールか…」

見る田がある」とはあるんだが
学生にそれはちよつとつらいかもな…

「せう言えば、私も今のベースが欲しくて悩んで悩んで…」

「私も、中古のドリームセット値切つて値切つて…」

「店員さん泣いてたぞ」

「どうしてあのドラマが欲しかったんだよ」

店員さん泣かせるつて…
どんだけ値切つたんだよ
大阪のオバちゃんかオマエは…

「あの、値切るつて?」

「ん?…欲しいものを手に入れるために努力と根性で負けさせる事
だよ!」

「まあ、ほとんどの人はやらねHけどな

「凄いですね!何か憧れます!...」

最近、マギの思考回路がどうなっているのか非常に気になることがある。
あるとい、唯を見つめていた律が突然

「あ、よしーみんなでバイトしよー。」

との一撃…

「はー。」

律の発言に思わずアホみたいな声を上げてしまった。

「バイト?」

「うふー、唯の楽器を買つたためにーー。」

ムギの質問に律がすぐ反応した。

「ええー…や、そんな悪いよ~」

バツが悪そうに唯が叫びながら

「…それでも鼓音部の活動の一環だって…」

「つひっせりこ…」

「私やつてみたいでやー。」

続いてムギも参加したいとの一言…

「…せひせん」

「アーチャーの...アーチャー...アーチャー...」

……律よ、やるのは別に嫌じやねんだけど俺と澪の意見も少しは聞けよ。

「おおー」

乗るムギ

一人の勢いに乗せられる唯

「どんなバイトあるんだろ……」

若干不気味さのある澪

セシル…

「おつ好きにしてられ……」

びつでも良くなつた俺
シユールすぎんだろ……

つーか…バイトかよ…

十四話（後書き）

遅くなり申し訳ありません！

次回はもう少し早く更新するよ、おまちます！

十五話（前書き）

前回の更新から一ヶ月近く経ってしまい本当に申し訳ありませんでした！――

正直に申しますと完全にプライベートのせいです！ハイ！――

部活の合宿やら、家族旅行やらで忙殺され

やつと今回更新する事が出来ました！――

.....

気が付いたら

なんだか薄暗い場所に立っていた
何処だここなんて疑問も持つたが
俺は今、目の前の光景が信じられなかつた

「さアてとツ、格下の分際でこの『大罪人』に喧嘩を売るその根性、
もオ一度見せて貰おうかア」

「か、勘弁してくれッ！！」

「オイオイ、自分から喧嘩売つてきたくせに何言つてんだア?」

「ひつ！」

「アハハハツ！アハハハハハハハハハハツ！！」

「ツ！-！-！」

」
」

田を開くとそこには見慣れた天井があつた。…

「夢...」

夢を見ていたらしい..
とてもなく嫌な夢...

「.....『大罪人』...か...」

それは俺にとつては忌々しい名前...

「クソったれが...」

朝っぱらから最低最悪の夢を見た為
不機嫌なMAXでリビングへと降りて行き
リビングのドアを開ける。

ガチャツ

「おはよー…って、どしたの朝から凄い顔してー?..」

ドアを開けると早々に姉貴に声をかけられた

「うぬせエな…ただ寝不足なだけだっての…」

まあ、まんざら嘘でも無い…

昨日の夜は幸治とのメールのやり取りで
寝たのが3時半だしな…

「ふ~ん…それにしても凄い顔だよ~。といあえず顔洗つたら~。」

「あ～そうだな…」

「あ～、おはよ～って随分と不機嫌そうね～。」

「べつに…とつあえず、顔洗つてくる…」

「あ～、雄河…」

何か呼ばれた気がしたが顔を洗うのを優先することにした
なのでとりあえず、洗面所のドアを開けようとドアノブに手を伸ば
したのだが
先に内側からドアが開け放たれた…

ガンッ

いきなりだったので避けることも出来ずに真正面から衝突した

「イッテエ……」

「うおっ」

中から出て来た人物も突然の衝突に驚いた声をあげた。
……つて待てよ……家には俺、姉貴、お袋の三人しかいねエはず……
そう思い、顔を上げるとそこにはここ3年位見てなかつた顔があつた。

「……親父か？」

「お前、雄河か？随分と大きくなつたなあ！」

「ンな事はどうでもいい、アンタ!」そこには3年位何してやがつた?」

「悪いなあ、仕事の関係でイタリアまでな！で、これがお土産」

そう言つと親父は着ていたスーツの内ポケットから一本の万年筆を取り出した…

「へりん…」

「そんなこと言わずに貰つとけって~」

「メンド臭H…」

「うともひりんな時間か…じゃあ、俺は少し会社に顔を出してくる

すると、俺にお土産の万年筆を押しつけて
そそくさと玄関の方へと走つて行つた…

「何だアイツ…」

「何か一時帰国らしいわよ。明日にはまたイタリアに戻るらしいわ」

「あつそ…」

「あなたの父親でしょ」

「アンタの夫でもあんただろ」

親父との再会後

感傷に浸る事も無く楽器屋へと足を運んだ。

まあ、理由は皆さんお分かりだと思つが唯のギターの下見である…
理由はギブソン・レスポールなんてめったに女が使うギターじゃね
エし

重いし、クセがあるし、ネックは太いしで唯が本当に使えるか不安
になつたつて訳だ

なので、まあ試し弾きをするつもりで【10GIA】の入り口を潜
つた…のだが…

「お、雄河先輩じゃないですか！？」

「…古賀」

「わあ～久しぶりスね～」

古賀健也

中学校の頃俺に良くべつっこってきた後輩である。

「…なんで、ここにいるんだ？」

「いや～ 実は～」

「お～い古賀、お前何して…って、お～おい懐かしい顔じゃねえか

「うーーーーー？」

店の奥の方から顔を出したのは
俺が最も忌み嫌う男…芦屋晋也だった
まあ、その事はまた別の話だ。

「待て待て待て、そう身構えんなつて。今日は純粋に密として…」
に来たんだ
別にお前を待ち伏せしてたなんて訳じやねえよ」

「よくもまあ、俺の前に平然と現れられたな？」

実を語つと世の事件についてハーヴィットが深く関わっている……

「だから、もう身構えんなって」

「ウルセヒ、お前なんか信じられるか」

「雄河先輩落ち着いて下さこよ」

「全く、お前は……そうだ雄河、一つ提案があるんだが

「あ？」

「お前、もつ一回俺達と組む気はねえか？」

「お、芦屋先輩ナイスアイディア！！

『大罪人』と『君臨者』また二人が組んだ所が見れるんですね！」

「！」

「断る」

「えつー！？」

「……」

「断ると言つたんだ」

「そんな、でも……」

「オーケー分かつた」

「芦屋先輩！？」

「仕方ねえだろ、雄河嫌だつて言つてんだからよ。なあ、雄河よお」

そつまいながら古屋は俺の耳元に口を寄せこいつ呟いた

「Regeret the thinning cut off...」

「悪いな、英語は得意じゃねェンだ

「そうかい。行くぞ、古賀～」

「あ、はーー！」

そう言い残すと古屋と古賀は姿を消した…

帰り道

俺は色々な事を思い出していた
芦屋の事、中学の頃の軽音部の事、そして『あの事』
今日は、何も起きなかつた。だが芦屋の性格上このまま終わる事は
決して無い。.

でも、もつ俺は『闇』には引きずり込まれねエ。. そいつたんだ

十五話（後書き）

『オリキャラ紹介』

黒「第一回目のオリジナルキャラクターは既存の通り
川霧雄河君です！！」

雄「何唐突に始めてんだテメエは……」

黒「早速ですが雄河君のプロフィールをまとめてみました」

雄「何、勝手に調べてんだ……」

本名：川霧雄河

身長：168cm

年齢：15

国籍：日本

職業・高校生

容姿・白い短髪と赤い瞳に中性的な体格の少年

備考・昔、中学校の頃に起きた事件によりあまり感情を表に出さなくなつた

黒「と書つのが雄河君のプロフィールで～す」

雄「もう勝手にしり…俺はもう帰る…」

黒「ちよ、ちよつと…えーと本人が帰つてしまつたため
今回のオリキャラ紹介は以上で～す…それでは～
ちよつと、雄河つてば～」

黒「つと…それと…感想を…感想を下さ～い…よろしく
お願ひします…!!」

「それじゃあ、また明日ね～」

「お～」

この前の芦屋との接触から三日が経ち一日間のバイトを終えた俺達は今日楽器屋に行き唯のギターを購入した。しかし、実の事を言うとバイト代だけではレスポールの値段に到達できなかつたのだが、琴吹が徐に店員とコンタクトを取ること五分、25万もしたレスホールの値段が5万にまで引き下げる時には琴吹以外の全員は開いた口が塞がらないと言つた風であつた。

なんでも、琴吹曰く父親の会社の系列店らしく顔が利いたとの事らしい…恐るべき琴吹家…

そんなことを考えていると…

「ゆ～う～が～！～！」

「あン？」

声のする方へ顔を向けると…
長い黒髪のポニーテール少女が走ってきて俺の腰辺りにダイブして
きた。

「つおッ…」

いきなり突っ込まれた為バランスを崩し
そのまま、後ろ向きに倒れる形となつた…
後ろ向き故に受け身を取るのは不可能…
待ち構えるは転倒…

ガンッ…！

「イッテエー！」

後頭部強打…

「やつと念えたさーつ…！」

少女は顔を俺の胸元あたりに埋めているので顔が見えない…

「つて、オマエ誰だ！？そして、知り合いだとしてもいきなり突っ込んで来んじゃねエー！」

「ほえ？」

不思議そう元少女が顔をあげ……つて……

「湊ー!? 何でここにいるんだー! ?」

「うようとした理由でこれから雄河の家でお世話になる事になった
モーツ

はつー? 何故にー? 僕ンなこと聞いてねバゾーーあ……あンのクソ
親父イイイイー!!
今度、帰ってきたらまづー顔面を殴るー!!

ちなみに、分からなこと思つから説明しておぐが、ロイツは『我那
がなは
覇湊』
みなと

俺が小学校の頃親父の転勤で一度沖縄に行つたときに一番仲の良かつた友達だ。

「いや、それからいつまでもじっくりやるわー。」

卷之三

「といつ訳で塗りやんは家で『』る事になりました。分かつた?」

「母親に向かってアンタとは何よ？」

「雄河、気にしても仕方ないわーっ！」

「母親も何も、行き成り過ぎんだる……何で俺に言わねーの……？
言えよー！後、お前は黙つてろよー……！」

「じゃあ、今、言ったわ」

「俺が良いでーのはそいつこいつ事じやねーんだよー……！」

まず、何故こんなにも俺が暴走気味にツツコミを入れているのかと言つと

あの後、湊を連れて家に帰宅して、即座にお袋に何故かと問いかけたところ

「何、アンタ知らなかつたの?」みたいな顔で見て来やがつた。
で、今の今まで事情を聞いていたのだがいい加減耐えられなくなりツツコミを入れてしまった。

「まあ、今更何言つても無駄なんだろうけどよ……」

何でも、湊の親が転勤で海外に行くらしく一人暮らしで高校に行かせるのは不安だから仲の良い家に相談してきたりしい……最終的に勝手に親父とお袋が決めてこうなった
で、何か空いてる部屋が綺麗になるまでは湊を俺の部屋で寝かせるらしい。

『でもな、一つだけ言わせて貰つが一緒に部屋で寝るのはダメだ』

「この発言のせいでお婆＆漆原一と説得され続ける羽田なり

「分かりました…」

諦めざるを得なくなつた

……

「ねえねえ、こんな風に一緒に寝るなんて久しぶりだな～」

「あ？あ、～そうだな…」

おかげで体力の限界である…
まともに話す体力も残っていない。

「テンション低いーつ、もつと上昇していく…」

「あの…明日二回りせんかひといふ今田が寝る

…

「うーん、分かった、お休み」

- ೨೫ -

はあ、せつと寝れる……

どんだけ夕フなんだ—イツ、

まあ、俺も「イツの」「う」といふは嫌いじゃねHけどな
つーか、トイツもウチじゃなくて沖縄の友達の家に行けば良かつた
んじやねHの…

「なあ、湊、お前高校はどうす…」

「<—...<—...<—...」

「寝の早シー?」

「イツどんだけ寝つき良このー?」

返事してからまだ20秒も経つてねよー!?

「仕方ね明日聞くか…」

そう、呟いた時、ひょいと強烈な睡魔が襲いかかってきた。
俺はそのまま、睡魔に身を委ね眠りについた。

翌朝、俺は絶望することなる…

十六話（後書き）

黒「じつも～更新遅れてすみません…黒翼です…今回は雄河では無くこの人に来てもらいました～」

湊「初めまして、今回から登場をさせて貰いました。我那覇湊です。」

黒「えーっと、じゃあせつかくだし湊に質問とかしてこい。」

湊「うふーん…歌とダンスなり得意やーっ！」

黒「じゃあまあ、あなたの特技は？」

湊「うーん…歌とダンスなり得意やーっ！」

黒「じゃあ、趣味は？」

湊「うーん、散歩とかかなー、ちなみにスポーツなら卓球が得意さーつ！」

黒「へえー、で、雄河に若干ホの字みたいだけビ…ビうなのっ！」

湊「うーん、好きか嫌いかで言えば好きだけど何て言つか友達以上、恋人未満みたいなかんじだね」

黒「じゃあ、そのうち雄河と…」

雄「真面目にコメントしきるこのバカ…」

黒&湊「雄河ーー？」

雄「えーっと、バカみたいな会話を聞いて頂きありがとウイザードま

す。次の更新はできるだけ迅速にやらせますので、承ください。
それでは以上『けいおん～夢翔る物語～』より主人公の川霧雄河
と「

黒＆湊「え！？ 終わりしづらつのー...」

雄「あン」

ギロッ

黒「うつ…作者の黒翼と」

湊「ちえ～…ヒロイーン？」なるのかな？の我那覇湊でした～

雄「それでは

十七話（龍樹や）

やつて出来た…

「待て待て待て……何、行きなり登場してんだよー?」ゴキブリかオマエは!?

「別に気にする事無^{ハシナシ}」セーイツ^{セイ}はお風呂にも一緒に入った仲なんだから「

「サラシと俺の黒歴史を暴露してんじゃねエエエエー!」

さてさて、何故冒頭からこんな会話をしているのかと言つと今朝まで遡らなくてはいけない…

湊が家に来た翌朝、高校はどうするかと聞こうと思ったのだが、い
かんせん遅刻、ギリギリだった為帰つてから聞く事に決め家を飛び出
した俺なのだが…そのプランは湊の手によつて打ち砕かれた…
学校に着くと生徒達の話題は決まって一緒だった
『転校生が来る』らしかつた…俺自身大して興味が無かつたのでそ
のままスルー…したのだが、良く良く考えてみると分かる筈だった

「はい、じゃあ入つて~

担任の声に反応した様に教室のドアが開け放たれた。教室のからは「可愛い～」などの声が漏れる……

「はい、じゃあ自己紹介して

担任に促されたソイツは元気に返事をして自己紹介を始めた。

「はいせいー自分ー我那覇湊だぞーー沖縄出身の十五歳ーって歳は皆と一緒にー…」

「な、な、な」

『果然とこす』とほの事を囁つのだらつ

「何やつてんだテメーーー？」

つこつとい叫んでしまつた。俺に怒鳴られた湊は笑いながらひりひりを向いてじりじりと這つた……

「あ、雄河ーこれからよひしへーーー！」

で、冒頭に繋がる訳だ…

「ナラツと俺の黒歴史を暴露してんじゃねエエエエ…！」

何て事言こやがるー？

「何々？川霧君と我那覇さんっていつも言つ関係？？」

同じクラスの女子生徒が冷やかしに掛つて来る。

「やつだぞー！雄河は昔から自分にベタベタだったからなー」

ふざけた調子で返す湊…

この状況で俺が取るべき行動は一つ…

「つオオオオ…マジで止めてトセコ湊さん…」

湊の言葉によつてクラスのほぼ全員が俺達をそんな感じの田で見て、来やがる為俺が折れる以外に解決策が見つかなかつた…こんなのが竹やりでステルス爆撃機に挑むよつたモノである…

「ええ～つと、我那覇さんの席はとうあえず平沢さんの後ろで良いかしら…？」

一部始終を見て氣まずいつじていた担任が間を読んで湊に話しかける…

「は～っこ～～…」

当たり前ながら元気良く返事をする湊…
某上条さんのセリフを借りるとこうだ…

「不幸だ…」

朝のホームルームも終わり湊の『転校』と言つ爆弾発現＆行動により朝っぱらから不機嫌度MAX状態に陥つた俺は叫び過ぎたせいか頭痛を引き起こし唯に止められながらも保健室へと向つたのだが、ラッキーなことに保健室の担当職員（名前は忘れた）が俺が入室するとほぼ同時に職員会議へと出かけて行つた。

そのため俺一人が保健室に取り残される形となり、状況としては非常に嬉しいのだが朝の件でモヤモヤ＆イライラしていたのでそんな考えは頭から飛んでいた…

つーか、アイツ何で寄りにも寄つてウチの高校なんだつつの…

「はあああああ～…」

近年稀にみる大きなため息をつき頭痛のする頭を押さえベットへ向う。

「とにかく寝ねエと体力がもたねエ…」

深く考えていても頭痛が増大しそうなので止める」とベッドへトントンとみを投げ出した…

「はあ…」

「ため息なんかついてたら幸せが逃げるわよ?」

「あ、?」

たつた今、意識を夢の世界へと飛ばそうとしていたが思わぬ侵入者により阻害される…

「…誰だ?アンタ?」

声をかけて来た人物：現在保健室の扉の前に立っている女性教師？
らしき人物は怪訝な顔を浮かべた…

「あなたねえ…保健室の先生に頼まれたから代わりに来てあげたんじゃない」

「……あひれ、ソイシはビホモ」

「面倒なやつが来たなア おこ……

「 もへ、そんな態度ばっかりしてると教室に返りもきけなくなへ。」

「そんな権限はアンタにねHだろ……」

「 い、い……」

図星なよつだ……

「つーか、俺、アンタに会つたことねHと黙つただけビヘ。誰?」

「えつ？ああ、私は基本的に音楽教諭だからね。あれ？でも確かあつてる筈よ？」

「知らん忘了た」

「何回かあなただつて受けたでしょ私の授業？」

「大概寝てたから知らん」

「つて……まあ、良いわ……私は山中をわ子

「ふーん、一週間ぐらいは覚えとくわ……」

「ずっと覚えてなさいよー？」

「気が向いたらな……とにかく俺は頭が痛なんだ、休ませろ」

「それもそうね、それじゃあ横になつて休んでなさい」

「へい」

やつと眠れる… そう思い再び夢の世界へ意識を飛ばそうとした時、再び教室のドアが開け放たれた…

バンツ！！

しかも、たゞそれとは違ひ勢いよく…

גְּדוֹלָה

「何で次にオマエが出現すんだよ...」

何を隠そう天然娘こと平沢唯であつた...

十七話（後書き）

雄「オマエ、もつと早く更新できねーのかよ？」

黒「申し訳ない……文化祭の準備やらなんやらで忙しきんだ……」

雄「はあ」

黒「じ、次回は頑張るからーーー。」

雄「じゃあ、頑張らなかつたら死刑な」

黒「ええー!?」

雄「それでは、次回の更新で」

黒「雄河？冗談ですよね～？」

雄「…」

黒「なんか言ってくれ！！」

本当にについてねエ…

そう思つたのは湊転入騒動の翌日だった。帰りのホームルーム時に担任からの明後日から始まる中間試験の事について話された…何でも、定期テストで赤点を取つた者は追試＆追試で合格点を取らなければそれまで部活動禁止だそうだ。

「なあ、雄河…」

「ンだよ?」

「テストどうじょうか…?」

自称俺の親友が帰りのホームルーム終了と同時に話しかけてくる。

「知らん、要は赤点をえ取らなければ何り問題はねエんだ。普通にやるだけだ」

「毎回思つんだけどよ、お前つて何でろくに勉強もしない癖にテストの点数良いんだよ?」

「ただ単に物覚えが良いだけだ」

幸治の質問を軽く流してやる。だが実際そんな大した理由など散在せず本当にただ単に物覚えが良いだけなのだ。実を言うと俺は今までにテスト勉強と言えるほど勉強も塾なんかに言つた事も皆無な訳だが赤点を取つた事は一度もない……確か…

「とつあえず俺はいつも通りにやる」

「ええ～じゃあ、他の連中とかも連れて行くからそれならいいだろ?よしちょっと待つてろ!!今から人を集めてくる!!」

納得もしていないのに幸治が勝手に話を進め始めた
そして、許可もしていないにも関わらず勝手に人を集めにクラスの
ど真ん中へと突っ込んで行つた。

「…」

だが、当の俺は華麗にスルー
待つのもダルイので帰宅開始…

クラスを出た直後「雄河ああああああああ！カムバアーック！…！」な
るアホの声が聞こえてきたが全く無視…

（　）（　）（　）

「…」

最近、発売した俺が好きなミュージシャンの新曲を聴きながら帰つ
ていると家へ帰る為の近道に差し掛かった。前回中野がバカどもに
絡まれてたとこだ…

さて、こっちから帰れば5分～10分程度早く着ける…のだが前回
の中野との件がある為嫌な予感しかしない…

「しゃあねエ、じつちから帰るか…」

意を決して路地裏の道を選ぶことにした…

今にしてみれば何てバカな事をしたんだらうと思つ…

「狭工な…」

両脇にビルが聳え立つてゐる為、体を横にして通らなければならなかつた。

もつすべ、通りきるといつ時にそれは現れた…

ヒュンッ

何かが風邪を切り裂く音…

ガン…！

そしてその何かが俺の頭部に着弾する音…

「ガツーー！」

頭部に激しい激痛が走る…恐らく鈍器か何かで頭部を強打されたのだろう。額に温かく赤い液体が流れる…

「ぐ、クソつたのが…！」

「おひ、結構しづひとこじゅねエの？」

「ツー？」

「机屋さんの話では強いつて話だったけどこれじゃ全然わかんねえ
な」

「あ、芦屋？　だと？」

マズイ……頭が……回ら……ねエ

「芦屋ア
」

や、ヤベエ……い、意識が……飛……んで……

『雄河、お前、母さんとお姉ちゃんは好きか?』

親父がまだ、家にいた頃の話だ。

小学校に入学したばかりだつた俺は、親父のその質問にこいつ答えた。

『うん!...だいすき』

屈託の無い笑みを浮かべながら
すると、親父はこんな事を言つた

『どうか、なら雄河、お前は男だ。男なら好きな人の一人や二人守
つてみせる。』

親父も何を意図として言つたのかは今でも分からぬ。

『うん…』

だが、当時小学生になりたての俺は笑顔で頷いた。

『でも、それは母さんやお姉ちゃんだけに限った話じゃない。お前の好きな人やお前を好きになってくれる人、友達、皆をだ』

『うーん…よくわかんないや』

『ハハハッ！ それも、そうだな』

当時小学生になりたての俺にこんな事を言う親父は変なのかもな。
分からなくて当然だ。

『でもな雄河、お前の名前に入ってる『雄』って字には、お前に強くなつて欲しいって意味も含めてあるんだぜ？』

『へ~』

『だから、雄河、お前は強くなれ、強くなつて命を守つてやれ』

『うんー。』

再び子供の頃の俺は元気良く頷く

『でも雄河、一つだけ約束だ。』

『なあに?』

『強くなる前に人に優しくあれ、それが俺とお前の約束だー。』

若干痩せた顔がニカッと八重歯をむき出しにして笑った。

「…………ん

氣絶していた……のだろう
俺の目が覚めたのは学校からの近道である路地裏であった。
とりあえず、倒れた体を起します。

「そういえば……俺……」

（確かに路地裏に入った時に頭を……）

恐る恐る頭へ手を伸ばす

「ツーーーーー！」

頭に手が触れた瞬間、頭部に激痛が走った。
手に付くベットリとした生暖かな感触……

「クソッたれが…」

そのまま、起こした体を再び地面へと投げる

「芦屋の野郎… 一体何を企んでやがる」

ふと、疑問に思つた事を口走る…しかし、今、口にしているのは俺だけ、故に誰からも返答は帰つて来ない。ただ、ビルの間を吹き抜け
る風の音だけが響き渡り、薄暗い路地を更に不気味に染め上げる。

「仕方無エ、帰るか…」

まだ、痛む頭を押さえフランクにつつも薄暗くなつた路地裏に歩みを
進める…その時

「雄河？」

聞き覚えのある声が背後から聞こえた為、前進を中断し背後を振り
返る。

「やつぱり雄河だ！…もつ、こんな時間まで何やつて…」

その声の主…湊はそこまで、話してこちらの様子に気付いた様だった。

「雄河…へどうしたんだ！そのケガ！？」

慌てた様子で俺の方へと駆け寄つて来る。

フラッ…

その瞬間、今までつなぎ止めていた意識が湊が来た安心感から薄れ、全身から力が抜け倒れる…

「雄河！？雄河！！」

最後に聞こえた湊の声が頭の中に反響し、俺は再び意識を失つた…

「ン…」

再び目を覚ますと、俺はベットに寝かされていた。
しかし、ただのベットではなく、薬品の臭いが染み付いた病院のベ
ットだった

「気が付いた様だね？」

ベットから上体を起こした所で背後の方から中年の男性の声が響い
た。

「アンタは…」

その見覚えのある顔に目が付いた。

白くなつた髪に多少、丸みを帯びた体：

「久しぶりだね、雄河君」

その男性は俺が最も世話になつた医者であつた。

「…………」

「君はまた、大変な事に巻き込まれていいよ!ひだね?・ひつ、止める
んじや無かったのかね?」

「分かつてんだよ、ンな事は」

この中年の男性は桜ヶ丘総合病院の医者、
坂本尚哉であった。

彼はこの病院のなかではトップを張る凄腕の医者なのである。

「全く……中学校の頃から変わらないね、君は。でも、これだけは言
つておくがね、これ以上無理をする様なら医者として忠告するよ、
彼と垣屋君と付き合つのめもひつ、止めなぞこ」

「分かつてんの……」

「良く聞くんだ、君自身は大丈夫かもしれないが、周りは皆、君を
心配しているんだ、現に君をここまで運んできた、湊さんだって、
泣きながら、『雄河を助けて』と言つて来てるんだよ?」

「……湊が?」

心がかつてない程痛んだ

他人に心配ばかりかけて……何やつてんだ俺は……

「悪かつたな……」

「それを言つのは僕じゃないだろ？…」

「ああ、そうだな」

「とりあえず君はまだ、安静にしておくんだね、また、傷口が開かない様にね」

とりあえず、明日、湊に謝るつ……

そう心に決め、俺は意識を深い眠りの中に沈ませていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5677u/>

けいおん!～夢翔る物語～

2011年11月17日19時26分発行